

2015年テーマ  
子どもに「つなぐ」暮らし方

第12回里山シンポジウム in 山武

里山に託す私たちの未来

# 里山と資源循環

2015年  
5月17日(日) 10時～17時15分

山武市立大富小学校

- 里山シンポジウム分科会報告
- 映画上映会 「木を植えた男」・「クラック！」
- 基調講演  
演題 F・バックさんが伝えたかったこと  
講師 スタジオジブリ 高畑 勲 監督
- 鼎談(ていだん) 「受けつごう、「木を植える心」と暮らし」  
・高畑勲氏・椎名千収(山武市長)・稗田忠弘(さんむふォレスト代表)

基調講演 スタジオジブリ 高畑 勲 監督



アニメーション映画監督。  
1935年三重県に生まれ、岡山で育つ。'59年に東京大学仏文科を卒業。  
スタジオジブリで「火垂るの墓」(88)、「おもひでぽろぽろ」(91)、「平成狸合戦ぽんぽこ」(94)、「ホーホケキョとなりの山田くん」(99)、2013年には待望の最新作「かくや姫の物語」が公開され、2015年米アカデミー賞にノミネートされた。

物品販売・サイン会  
F・バック氏 DVD, 高畑勲氏 本, 西村由紀江氏 CD

申込不要  
資料代500円

企画・制作: 倉島貴浩 デザイン・イラスト: 松下優子

主催 里山シンポジウム実行委員会

山武市市民提案型交流のまちづくり推進事業

共催 山武市・山武市教育委員会 後援 千葉県

協力 公益財団法人千葉県緑化推進委員会・NPO法人千葉自然学校・NPO法人ちば里山センター・千葉県立東金青年の家

# 里山、託す私たちの未来 第12回里山シンポジウム in 山武

2015年テーマ  
子どもにのびる里山

## 里山と資源循環

5/17(日)

10時～17時15分

場所：山武市立大富小学校  
資料代 500円

山武市には、山地に広がる森林、里から平地に広がる農地、そして海岸にいたる変化に富んだ豊かな環境があります。この豊かな環境は太古の昔から人々の暮らしとともに培われてきたものです。

しかし、これらの資源は、私たちの暮らし方によってはその価値を損なってしまうたり、資源そのものを失ってしまうことなどが危惧されています。そうしたことから、近年ではバイオマスエネルギーの利用や地産地消など、山武の資源を発掘し、活かそうとする試みも始まっています。

鼎談(ていだん)では、子どもたちやそのまた子どもたち、そして未来の世代へと豊かな環境を引き継いでいく持続可能な暮らし方、生き方とはどんなものか、アニメーション映画「木を植えた男」からそのヒントを探りながら、山武で取り組むべきまちづくりについて、皆さんと一緒に考えたいと思います。

## PROGRAM

- 9:45 開場
- 10:00 分科会
- ① サンプスギの住まいづくりの今とこれから  
担当者:石井充(LLPグループ「木と土の家」ほか)
  - ② 山武市ならではの資源循環を目指した、新しい農業へ  
担当者:木下敬三、阿部順(さんむアクションミュージアムほか)
  - ③ 里山資源を活かす循環ライフのすすめ(見学会あり)  
担当者:中村彰宏、佐瀬響(さんむ里山資源循環ネットワークほか)
  - ④ 子どもと共に味わう里山の自然と恵み  
担当者:渡辺章、野口よし子、中村俊彦(宇宙あそびむらほか)
- 11:30 昼休み
- ※地元団体による昼食販売があります。  
※売切れ次第終了します。近隣にはコンビニ、飲食店等がありませんので予めご了承ください。
- 13:00 開会行事
- 挨拶:里山シンポジウム実行委員会 代表 並木秀幸  
山武市長 椎名千収
- 里山シンポジウム分科会報告
- 14:00 休憩

## 14:10 映画上映会

「クラック!」  
「木を植えた男」



木を植えた男  
© Soci t  Radio-Canada

## 山武での事例報告

「Present Tree for さんむ日向の森について」

## 15:00 基調講演「F・バックさんが伝えたかったこと」

講師:高畑勲氏(株式会社スタジオジブリ)

## 15:30 休憩

## 15:40 鼎談(ていだん)「受けつごう、「木を植える心」とくらし」

高畑勲氏・椎名千収(山武市長)・穂田忠弘(さんむフォレスト代表)

## 16:30 ピアノミニコンサート

西村由紀江氏

## 17:00 閉会行事

挨拶:里山シンポジウム実行委員会 顧問 金親博榮

## 17:15 終了

物品販売とサイン会があります

F・バック氏 DVD、高畑勲氏 本、西村由紀江氏 CD

## フレデリック・バック監督 作品紹介

### 木を植えた男 L'Homme qui Plantait des Arbres 1987年 / 30分

羊飼いのエルゼアール・プッフイエは、たった一人で荒地に木を植え続けていた。プッフイエの無償の行為は、不毛の地に緑をしたらせ、生命の輝きに満ちた場所に甦らせた。ジャン・ジノノの原作に感銘を受けたバックが、5年半の歳月をかけ、作り上げた代表作。アカデミー賞短編アニメーション部門受賞。この映画に感動した人々による植樹運動が世界中に広がりを見せた。

## プロフィール紹介



高畑 勲  
(アニメーション映画監督)

1935年三重県に生まれ、岡山で育つ。'59年に東京大学仏文科を卒業、東映動画へ入社。テレビシリーズ「狼少年ケン」で初演出。'68劇場用長編「太陽の王子 ホルスの大冒険」を初監督。以後、「アルプスの少女ハイジ」(74)、「舟をたずねて三千里」(76)、「赤毛のアン」(79)(以上、TV演出)、「ジャリ子チエ」(81)、「ゼロ弾きのゴーシュ」(82)。1985年宮崎とともにスタジオジブリ設立に参加。「火垂るの簾」(88)、「おもひでぽろぽろ」(91)、「平成狸合戦ぽんぽこ」(94)、「ホーホケキョとなりの山田くん」(99)を発表。2013年には待望の最新作「かぐや姫の物語」が公開され、2015年、同作品は第87回米アカデミー賞長編アニメーション映画部門賞にノミネートされている。

他に「キリクと魔女」「王と鳥」「アズールとアスマール」の日本語版翻訳・演出や日大芸術学部映画学科などで教鞭をとるかたわら、様々な執筆活動を行い、ジャン・ジノノの小説とそれに基づくフレデリック・バックのアニメーション作品に関する「木を植えた男を読む」(訳著)などを発表している。



### 西村由紀江

(作曲家/ピアニスト)

幼少より音楽の才能を認められ、ヨーロッパ、アメリカ、東南アジア諸国への演奏旅行に参加。マエストロや世界の一流オーケストラとも共演し、絶賛を博す。桐朋学園大学入学と同時にデビュー。ドラマ・映画・CMの音楽を多数担当するほか、TV・ラジオの出演やエッセイの執筆も行う。年間60本を超えるコンサートで全国各地を訪れる傍ら、ライブワークとして「学校コンサート」や「病院コンサート」、そして被災地にピアノを届ける活動「Smile Piano 500」にも精力を注ぐ。

2012年、アカデミー賞受賞アニメーション作家、フレデリック・バック氏の絵画とのコラボレーションアルバムを発売し、注目を浴びる。代表作は、ドラマ「101回目のプロポーズ」、映画「きつねおぼん」、NHK「アーカイブス」など。



## 会場 アクセス

会場：山武市立大富小学校

山武市新築ト60番地

駐車場：山武市役所

山武市役所296番地

※車は市役所へ停めてください

成東駅から徒歩14分

山武市役所から徒歩20分

成東駅

成東駅入口

山武市役所

津辺

126

山武市役所

## 目次

## ■開会挨拶

里山シンポジウム実行委員会代表	並木秀幸	2
山武市長	椎名千収	3
千葉県農林水産部森林課長	白石勇一	4

## ■分科会報告

コーディネーター 栗原裕治

第1分科会 「サンプスギの住まいづくりの今とこれから」		5
担当者：石井 充 (LLP グループ「木と土の家」ほか)		
第2分科会 「山武市ならではの資源循環を目指した、新しい農業へ」		9
担当者：木下敬三、阿部順 (さんむアクションミュージアム ほか)		
第3分科会 「里山資源を生かす循環ライフのすすめ」		13
担当者：中村彰宏、佐瀬響 (さんむ里山資源循環ネットワーク ほか)		
第4分科会 「子どもと共に味わう里山の自然と恵み」		17
担当者：渡辺章、野口よし子、中村俊彦 (宇宙あそびむら ほか)		
第5分科会 「耕作放棄地から谷津田・里山林を元気にしよう！」		21
担当者：佐藤聡子 (NPO 法人バランス 21・谷当里山クラブ)		
第6分科会 「台湾里山事情」		24
担当者：風間俊雄、劉 淑恵 (いちばら里山クラブ、台湾国立高雄師範大学地理学系)		

■映画上映会 「木を植えた男」 「クラック」		28
------------------------	--	----

■山武でのプレゼントツリー報告 Present Tree for さんむ日向の森について		29
認定 NPO 法人 環境リレーションズ研究所 平沢真実子		

■基調講演 「F・バックさんが伝えたかったこと」		30
株式会社スタジオ・ジブリ 高畑 勲		
資料「戦争・国境・民族・民俗 ～バックさんの自伝を読んで～」		36

■鼎 談 「受けつごう、「木を植える心」とくらし」		40
高畑 勲・椎名千収 (山武市長) ・稗田忠弘 (さんむフォレスト代表)		

■ピアノミニコンサート	演奏 西村由紀江	50
-------------	----------	----

■大富ばやし	大富小学校児童	53
--------	---------	----

■会場風景	パネル展示、他	54
-------	---------	----

■メディア	新聞、ケーブルTV	57
-------	-----------	----

■閉会挨拶	里山シンポジウム実行委員会 顧問 金親博榮	59
-------	-----------------------	----

## 第12回里山シンポジウム in 山武開催にあたって

里山シンポジウム実行委員会代表 並木秀幸

本日は、ご多忙のところご来場いただきまして誠にありがとうございます。12回目の里山シンポジウムを開催するにあたり、山武市様、山武市教育委員会様をはじめ、千葉県様、公益社団法人千葉県緑化推進委員会様、NPO法人千葉自然学校様、千葉県立東金青年の家様からもご協力をいただき、開催の運びとなりましたことに感謝いたします。



我々、里山シンポジウム実行委員会は、「里山に託す私たちの未来」をテーマに過去11年間、県内各地において里山シンポジウムを続けてまいりました。「里山」とは、自然の営みと人々の生業によって長年にわたって形成されてきた環境であり、風景であり、システムであります。そしてこの里山のすばらしさを改めて学び、伝え合う場が里山シンポジウムであります。今年度は、私の生まれ故郷でもあります山武市において、この里山シンポジウムを開催できることを誠に嬉しく感じております。

昨今、食糧やエネルギーなどに関する種々の社会問題もあつてか、社会の持続可能性に対する注目が増えてまいりました。持続可能な社会を目指す上で一つの方向性とされているのが、地域で必要な資源を地域で作出し、需要と供給のサイクルを回してゆく資源循環という考え方です。

山武市には、山地に広がる森林や広大な農地、そして九十九里を望む海岸線まで、変化に富んだ豊かな環境があります。古来、人々はこれらを生活に活かしてきたわけですが、里山は過去の思い出ではなく、現代においても、山武の里山資源を活かした新たな取り組みの数々が始まっています。ここ山武市であれば、「資源循環のまちづくり」のイメージを描くことも可能ではないでしょうか。

本日は、お集まりいただいた皆様と共に、山武で取り組むべきまちづくりについて学び合うことができると考えております。今日一日の成果が、持続可能な社会を築くために有意義なものとなりますよう期待し、挨拶とさせていただきます。

## 山武市で開催される第12回里山シンポジウムに当たって

山武市長 椎名千収

こんにちは。山武市で、このような会が開催されることを大変ありがたく思います。本日来られた皆さんは、里山や自然環境を守っていかうという熱意のある方々ばかりかと思しますので、里山に関して、ごく平均的な知識しかない私のような人間があまりしゃべっても仕方ないかもしれませんが、ご挨拶をさせていただきます。

このように大勢の方々が、山武市の自然を回復しようというお気持ちを持っておられ、山武市の自然環境を、自らの手で守っていかうとされております。

資源循環というお話がございましたが、循環というのは、水平な所で回そうとしても回りません。必ずどこかで、循環系の外側からエネルギーを入れて持ち上げないと、循環は起こらないということになります。そういった問題が高じて、我々は、ともすると化石燃料をたくさん燃やすことや、あるいは原子力発電によって一気に持ち上げて、後は楽をしようというような考えに陥ってしまいます。この様な発想が、様々な問題を引き起こしているのではないのでしょうか。

資源循環を人間の手で、これからも持続可能な形で続けていくためには、一か所で大きく持ち上げるのではなく、それぞれの立場で、それぞれがしっかりと、少しずつ持ち上げてゆかなくては、資源循環は上手く行きません。ですから、色々な所で資源循環に関する取り組みが起こることを期待しております。そして、行政として今後も皆さんの支援をしていきたいと考えております。

以上、整いませんがご挨拶の言葉とかえさせていただきます。



## 千葉県「里山条例」に基づく森づくり

千葉県森林課長 白石勇一

本日は、里山シンポジウムが第12回を迎え、このように盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。

実行委員会の皆様はじめ、里山活動団体の皆様には、日ごろから「里山条例」の基本理念にのっとり、里山の整備や活用に汗を流していただき、厚くお礼申し上げます。

さて、千葉県では昨年度、「千葉県農林水産業振興計画」そして「第3次里山基本計画」がスタートいたしました。

第3次里山基本計画では、里山活動団体による森林の保全・整備と活用に加え、企業による森づくりも促進することとしていますが、御陰様で平成26年度末における里山活動面積は191ヘクタール、企業による森づくりは56ヘクタール、併せて247ヘクタールに及ぶ森林が、整備・活用されています。

このシンポジウムも回を重ねる都度、開催地域との関係が深まり、多くの活動団体が参加されていると聞きます。ここ山武市は、千葉県では代表的な林業地であったことに加え、現在でも木質バイオマスの利用に積極的に取り組んでおられる地域です。

おそらく、午前中の分科会でも活発なディスカッションがあったことと思います。

このあとも、映画上映や鼎談（ていだん）など、盛り沢山の内容ですが、県民主体でこのような行事が行われることに深く敬意を表します。

さらに、ここ大富小学校の建物は、内装に木を使い「建築コンクール千葉 特別優良賞」を受賞した建物ですので、山づくりから建築までを身近に感じられる、このような催しにはふさわしい場所と思います。

県では、今後とも「多様な方々の参画による森林整備活動の促進と森林の利活用」を促進していく所存です。本日のシンポジウムをきっかけとして、里山や森林に関心を持ってくれる方が一層増えることと、活動に関わってきた皆様のご健勝を祈念いたしまして、あいさつとさせていただきます。



## 分科会報告

## 第1分科会「サンプスギの住まいづくりの今とこれから」

- コーディネーター 西塚健治
- 主催団体 有限責任事業組合  
グループ「木と土の家」



## ■内 容

## 主 旨

我々有限責任事業組合グループ「木と土の家」は、「木材、林業の活性化を図ることで地域経済の発展に貢献し、荒廃しつつある山林の再生につなげ、地域環境の保護にも貢献する」という理念のもと、平成19年4月に設立し活動してまいりました。

山武市の資源としてのサンプスギを地元で活用することが、地域経済の循環を生み、そのことが山林の再生につながると考えています。

このような理念のもとに過去8年活動してまいりましたが、まだまだ地域経済への貢献、山林の再生には至っていないのが現実です。

我々はこのような現状を打破する為、各行政の皆様方に地元林業の振興策の参考にして頂き、またご意見を拝聴いたしたく、当グループの活動報告を兼ねながら座談会を開催したいと企画致しました。



## 1 有限責任事業組合グループ「木と土の家」の活動報告

当グループの活動報告として、設立以来の山武郡市における工事实績について報告し、その間に発生した諸問題や感想を述べた。



## 2 山武市の資源としてのサンプスギの再認識、公共建築への活用、山林整備の現状について

はじめに、山武市が既にも実施しているサンプスギの利用促進に関する施策に関し、説明を求め、その後出席者による意見交換をした。

### バイオマス推進室

サンプスギ関連の窓口として、木質バイオマス・林業の事務担当として当推進室があり平成21年度より活動を開始した。

市内産材の利用促進事業として、新築住宅の補助金を設定している。

市の予算を利用する為、当然のことながら市内にお金が落ちるよう市内産材で、市内業者の製材で、市民が利用するという厳しい制約はある。

補助金利用実績として24年度3件、25年度5件、26年度2件、27年度は4件あるが、伸び悩みの感はぬぐえない。

市においては、公共建築物における市内産木材の利用促進の方針が示され、各部署で利用促進を図ってはいる。



### 都市整備課

リフォーム補助制度が存在する。工事費の10分の1、20万円まで、市内業者に限定。

26年度分については、予算500万円をすべて使い切った。

27年度からは、居住住宅のみとし、上限20万円とする。詳しくはお問い合わせを。

### LLPグループ「木と土の家」

その制度を利用させていただいているが、その内容について居住地のみ条件付きで、100万円までの補助制度が他地域に存在するので、上限枠を広げてほしい。また提出書等、手続き的にもう少し使い勝手を良くしてほしいとの要望に、予算枠もあるので、検討課題としたいとの回答があった。



### ログハウス施工者

ログハウスを施工している者だが、ご存知の通りログハウスは大量の木材を使用する。地域材の利用促進を図るならば、ログハウスについても検討する意味はあるのではないかと。

また、サンプスギの定義とは？溝ぐされ病とは？との問いに森林研究センターより、縷々説明がなされ、北部林業事務所より山武杉の強度は高いとの説明がなされた。

バイオマス推進室より、山武市ではログハウスを補助金の対象にはしていない由説明がなされた。それだけ良い材料がなぜ使われないのか？という問いに、ユーザーが魅力を感じない、業者の発信力が不足している、価値観の変化がある（時代の流れか）、一般住宅で使われる木材は量が少ない、等の意見があった。



前述の回答に続けて、公共建築物における木材の利用促進についてはどうか？

### 千葉県北部林業事務所

千葉県住宅課の県営住宅の造作材には木材を利用している。が、いかんせん入札の関係でコストの問題（県産材は高価）やJAS規格の問題がある。

学校建築物は有用性があるが、地場業者からはどうしても高価な積算が出てくるし規格対応の問題もある。

### 木材振興協会

JAS認定工場は、県内にあることはあるが、タイプが異なる。

しかし、千葉の木認証制度があり、現状JAS相当での対応は可能と考える。



### 千葉県木材市場

県内産JASはない。JAS相当のみである。公共建築物にはKD材（人工乾燥）が求められるが、そうすることによってサンプスギの良さが失われてしまうという現実がある（樹液の抜け）

### コーディネーター

成東子ども園では、構造材125立米を使用した。市の計らいで事前発注をしてもらい、自然乾燥で対応できた。6万円/立米での受注であったが、製材代金や歩留まりの関係で丸太の代金は3万円/立米となる。山林からの搬出費用は1.8万円/立米程度かかるので、立木代金は1.2万/立米となるのが現実である。

出席者： 千葉県 北部林業事務所、森林研究センター  
山武市 市民自治支援課、バイオマス推進室、都市整備課  
森林組合 北総支部  
千葉県木材市場、まる太くんプロジェクト、千葉大学デザイン文化計画研究室

### 以下、参加者からの発言

- ・市の建築物で、なぜサンプスギの指定ができないのか？なるとうこども園以来あまり事例がないが（LLPグループ「木と土の家」）
- ・良い木と売れる木は違うのではないかと？曲がった木、節のある木、虫食いの木が良いと思う人もいる。（ログハウス施工者）
- ・やはり、材の利用促進を図る必要がある。  
（まる太君プロジェクト）
- ・木材がもっと利用されれば、山に戻る人が増えてくるのではないかと。（コーディネーター）
- ・里山の再生と地域を元気に、はリンクしている。  
森林そのものを丸ごとユース。里山産業化。代替エネルギーとしての木材取り組みをもっと。原木に近い形での熱源利用。（千葉大学）
- ・森林整備計画があるが、いかがなものなのか？法律で決められ、上位計画から下がってくるような印象があるが…。（コーディネーター）
- ・市の計画は横並びの計画であり、取り立てて特徴はない。（バイオマス推進室）
- ・森林計画制度があり、認定請求が必要であり。規模の問題がある。（北部林業事務所）
- ・各補助制度の説明がなされた。（森林組合）
- ・千葉規格というものを作ったらどうか？（まる太君プロジェクト）
- ・取り組んだが、ダメだった。（千葉県木材市場）



以上、この座談会が官民相互の共通理解につながり、サンプスギの資源循環に貢献できることを願っています。

## 第2分科会 「資源循環を目指した農業」

- コーディネーター 阿部 順（\*）  
木下敬三（\*\*）
- 主催団体 \*Agri Design Works  
\*\*さんむアクションミュージアム
- 内 容



### I. 趣旨説明と話題提供

資源環境を目指した農業 「問題点の洗い出しと山武市で取り組める事」 阿部 順

#### 1. 持続可能な農業

（じぞくかのうなのうぎょう、英：Sustainable agriculture サステイナブル・アグリカルチャー）とは、持続可能性を考えた農業のことである。

農業に関する環境問題は、実は多様で深刻なものが多い。例えば、農地を開拓する際に、森林など元々そこにあった自然環境を破壊したり、作物の栽培に必要な水（河川水、湖水、地下水など）を過剰に使用することで水資源の減少を招いたり、農薬により土壤汚染や水質汚染を起こしたりといった問題がある。また、農産物に関係する問題、例えば食糧問題、食料の安全に関する問題などの社会問題などに関わっている。

これらの問題を持続可能性の考え方を取り入れて解決していこうとするのが、持続可能な農業である。

#### 2. 循環型農業

循環型農業とは、畜産や農業、家庭などで出る廃棄物を肥料に利用したり、農業で出るゴミを循環利用することは、持続可能な農業になりうる。

#### 3. 有機農業

有機農業は本来、化学肥料や農薬を使わない農業である。それは自然由来で環境負荷のない肥料や農薬を使うことにつながり、持続可能な農業になりうる。

#### 4. 地産地消・フードマイレージ

遠い海外で生産された農産物よりも、近いところで生産された農産物を選ぶことで、エネルギー消費や温室効果ガスを減らす考え方。

環境に配慮した農業のあり方として、Agri Design Works は農薬を使わない野菜や穀物の栽培を実践しています。

- ① 冬期湛水不耕起栽培
- ② 青色ダイオードと光合成細菌利用の無農薬トマト栽培
- ③ 枝豆混植のアワノメイガ対策無農薬トウモロコシ栽培

例えば、給食センターや飲食店の残さ（残飯）を有料で産廃で出すならば、鶏のえさや堆肥に加工する2次利用を提案します。

平飼い鶏ファームを設立して、抗生物質や農薬のかかった餌を使用しない安全な玉子を、学校給食は直売所に供給し、玉子の地産地消をめざす。

食品残さは、微生物醗酵堆肥等に製造することによって、化学肥料を製造しない野菜作りに再利用し、安全な無農薬野菜を学校給食や直売所に提供する。

## II. 質疑・意見交換・参加者の実践発表

- ・参加者 A： 農薬は戦後、S. 40 年くらいから使い始めた。  
農薬の濫用開始。しかし、農薬使用は経済と密接に関係する。必要悪かもしれない。  
堆肥は手間がかかるので、せいぜい自家用分くらいしか、やりきれない。  
自分は 63 歳だが、まわりは 70 歳以上でも現役だ。外から来た人と地元では、考え方が違う。「よそ者」だけでは、どうにもならないだろう。
- ⇒ 阿部：確かに、地域では浮いている。だが逆に、「よそ者」だから、しがらみなくできる。  
経済的なことを優先させるのは、メチャクチャむずかしい。
- ・A： 地元の人に働きかけなければ、ただの自己満足だろう。今日は地元の人には来ていない。
- ⇒ 地元の人に積極的に働きかけない。実績を上げれば、それを見て増えてくると思っている。
- ・A： 地元も、今の状態に対して問題意識は持っている。作田川は昔汚れていたが、(地元の人が気をつけるようになって) 少しはきれいになった。  
ただ、目の前の生活を考えたら、有機無農薬ではやっていけない。
- ・B： 山武市は有機農業が盛んで、一応、生活は成り立っている。どこを優先させるか、だ。  
自分の生活のためだけだったら、農薬を使う。安全を優先させるかどうか。  
両者に接点がなくとも、仕方がない。
- ・C： 自分は土地改良区の役員をやっているので、どっちの言い分もわかる。無農薬、有機農業を勧めても「あんたはもの好きだよな」で終わる。  
外国から見たら、いま日本は農薬漬けだ。(消費者の眼も) ちょっと違ってきた。少しずつだが、安全を求める消費者が着実に増えている。  
環境に配慮した農作物を買ってくれる人、サポートしてくれる人をどう増やすか。ぜひ、増やしたい。
- ・B： トマト、トウモロコシを無農薬で作っている。
- ・D： 千葉市の谷津田等保全地域で 2012 年に「谷当里山計画 NPO 法人バランス 21」という団体を立ち上げ、里山再生活動を始めた。  
休耕田で不耕起冬期湛水稻作を行っているが、田んぼだけでなく、周辺の山林の手入れをしたところ、里山植物が戻ってきた。  
谷津田の農業は、自然を楽しみながらできる。  
3 年目からは浦安市からバスで田植え体験にやってくる。千葉市環境協会のイベントとしても 3 日間で 250 名の参加があった。次世代につないでいく。
- ・E： ボランティア的稲作と、生業としての農業があると思う。有機農業を支援するものはあるのか？

⇒ 助成金がある。ただし、しほりもあるので、めんどうだ。6次産業として（付加価値をつけて）収入を増やすというやりかたもある。お客さんが喜ぶものを作る。

- ・C：阿部さんは「農業者」なので、土地も借りられる。土地を借りても、返すのなら面倒、という農業者が多い。  
「ちばエコ農産物」という認定制度があるが、手続きが面倒なので、参加者が伸びていない。ドイツでは、（有機農業で）価格が3割高までだったら買うというが、千葉ではそこまでいかない。

### 3. 参加者の自己紹介と感想

- ・有機農業をやっている。
- ・有機農業の研修中。将来農業に関わりたい。  
生産者が志を持つこと。消費者の意識を変えるよう、働きかける（販売する）。
- ・大学生。
- ・大学生。祖父母が農家。
- ・消費者として参加。
- ・両親が岐阜県で農業をやっている。
- ・野良仕事の手伝いをしている。  
家庭菜園で黙って有機農法をやって、農家のお手本になるようにしている。
- ・渡り鳥、特にハクチョウの越冬拠点を作りたいので、そのために冬期湛水稻作に興味がある。
- ・究極の無農薬の農業というのは植物工場のように隔離するしかないのだろうか、ということが気になっている。
- ・インドネシアからの留学生。農業体験して勉強中。
- ・浦安に住んでいて、ほとんど東京都民。江戸川区から野菜が来る。都市農業は高価。
- ・山を管理している。里山センターを作った。
- ・君津で羊飼いをしている。
- ・東京育ちで、もともと三番瀬で海の活動をしていたが、今は里山にのめり込んでいる。
- ・消費者として参加した。
- ・山武市（のはずれ）出身だが、18歳から東京に出た。田んぼは放棄せざるを得なかった。なんとか再生したい。

（文責 小倉久子）



## 資料

## 第2分科会「山武市ならではの資源循環を目指した、新しい農業へ」

さんむアクションミュージアム 木下敬三

山武市ならではの資源循環を目指した、新しい農業へ資源循環からまちおこしへ

## 目的

## 市内産の農・畜産物は市内での消化を目指す

主に給食センター 市場出し不可（B,C級品）でも有効利用  
 廃棄物の堆肥化からメタンガスの利用等の循環・徹底利用  
 計画生産は可能か？

市民へ 専用直売所から

JA直売所から 有機野菜ネットワーク？

小売店直売コーナーから

有機廃棄物の資源回収（燃えるゴミで焼却炉へ入れない・炉の温度低下の原因）

## 市の重点政策として

☆子どもたちへの副読本編集の必要性

副読本 『郷土の銘木・サンプスギ』『山武市の農・畜産物』  
 タブレット導入による電子版と印刷物による小児教育の重要性

☆市価との差を市が助成（高くても買う）

新規就農者の生産ロスと販売コストの削減  
 消費の確保で安心して生産に励む  
 フードマイレージの削減

☆空き家対策に

新規就農者の受け入れ宿舍やコンパクトシティーの拠点づくりに  
 市で借り上げる、就農者に安価貸し出し

空き家の所有権と利用権の分離 条例で可能な範囲は？

☆耕作放棄地の解消へ 農地の利用権の分離 条例で可能な範囲は？

農業大生校生の獲得

農業指導者の確保？

☆観光への利用 イチゴ ???

体験農業 観光農園 市民農園

☆『農ある暮らし』への助力・努力へ

アドバイザー派遣制度の利用

市民農園の普及

## ★山武市の農業政策について調査事項は？

山武市の基幹産業は『農業』なのか？

遊休農地の面積？

空き家の戸数？

新規就農希望者数？

山武市の特長 農法 品目 出荷量・売り上げ率？

**時流はチャンス！****これを逃がす手は****ないぞ！！**☆農産物情報の発信？機関の創設？必要か？

国の地方創生事業助成金の利用で、時流に乗って『開かれたまち、発展するまち』を目指す。

### 第3分科会 里山資源を活かす循環ライフのすすめ

- 発表者 中村彰宏 佐瀬響
- 主催団体 さんむ里山資源循環ネットワーク  
NPO 法人 WO-un

#### ■内 容

#### さんむ木づかいネット

#### ～山武市には“宝の山”と言える豊富な里山資源が利用されずに眠っている～

江戸時代からこの地域でサンプスギを育てる林業が営まれてきていますが、海外の木材の輸入や林業従事者の減少、何より木を使う暮らしが消えてきている事で、山林が荒れています。

「地産地消」という言葉が注目されています。地元の農作物を食べる事が体に良いように、地元の木を使った住まい・暮らしをする事は体にも自然にもとても良いのです。

#### 「住まい」に木を使うと・・・

木のぬくもりや匂いが心と体をいやしてくれます。地元の気候で育った木材が、一番良い姿を保ってくれます。



#### 「暮らし」に木を使うと・・・

自然に負荷の少ない暮らしが実践できます。エネルギーを地元で手に入れられる事は、災害時にも役立ちます。



#### ■「さんむ木づかいネット」の紹介

さんむ木づかいネットは、「山武市バイオマスタウン構想」のもと、千葉県山武市を中心とした自然資源の循環型社会を目指しています。

「庭木や間伐材・倒木を有効利用したい」という声と、「木を使った家づくりや、薪ストーブ・薪ボイラーなどの暮らしをしたい」という声を集めて、需要と供給をつなげようとするネットワークです。

■さんむ木づかいネットのメンバー

- 「オーナー」・・・山の地主や提供できる庭木を持つ人など、里山資源を生産・管理する人。
- 「ワーカー」・・・森林整備や間伐材伐採、庭木伐採などをして木を調達・運搬する働き手。
- 「メーカー」・・・製材、建築、薪ストーブ販売など、木を利用できるようにする企業や団体。
- 「ユーザー」・・・地元木材で家を建てる、薪ストーブ等を使うなど、木を利用・消費する人。

■ネットワーク登録者

オーナー	5名
ワーカー	2団体
メーカー	3団体
ユーザー	1団体 1名



■木づかいネットの役割

- ネットワークの情報公開
  - オーナー、ワーカー、メーカー、ユーザーの団体・企業の情報発信
- 個人が参加するための方法
  - 木を使った住まいや生活の方法の紹介、機器、商品などの紹介
- 木材あります欲しい等の情報交換
  - 行先を捜している木材情報・木材を必要としている人の情報を交換する
- 実践の相談窓口など
  - 業者紹介、道具の貸し出し、個別相談



■木づかいネットのメンバー

**さんむフォレスト** メーカー

**山武杉の家をつくる建築グループ**  
 地域の木材で伝統工法により、自然と人が共生する暮らしを提案しています。山武杉の積み木などの商品も開発・販売しています。

<http://www.sanmu-forest.com>

**NPO法人元気森守隊** メーカー

**木の駅事業・木質ペレットの推進**  
 山武市の山林に眠っている木材を買い取ってバイオマス資源として活用します。木質ペレットの製造・ペレットストーブの推進をしています。

<http://www.genkimorimorita.com>

**かわはら薪ストーブ本舗** メーカー

**薪ストーブの相談・設置・薪の提供**  
 薪ストーブの導入相談やストーブの提案・設置工事から、本体・煙突のメンテナンス、薪の製造と販売をしています。薪ストーブの展示場もあります。

[http://www.geocities.jp/frankrin\\_1st/eaath\\_re\\_sambu](http://www.geocities.jp/frankrin_1st/eaath_re_sambu)

**NPO法人山武市観光協会** ユーザー

**木の有効利用で伝統製法の塩づくり**  
 廃材や伐材を使って、九十九里の海水を煮出して塩を作ります。伝統製法の塩づくり体験も開催。

<http://www.sammukanko.jp>

## ■山武市が支援する制度

### ○市内産木材利用促進事業補助金

市内で産出された木材を一定割合以上使用し、かつ市内の工務店の施工による戸建木造住宅を新築・増築・購入された方へ、経費の一部を補助

### ○ペレットストーブ等補助金

木質ペレットストーブ、薪ストーブ又はバイオマスボイラー等の購入及び設置に要する経費（本体、煙突、附属部品、壁貫通工事、防火工事及び取付施工料に係るものに限る。）の2分の1以内の額を補助

### ○住宅用太陽光発電システム設置補助金

家庭用太陽光発電システムの新設に対して1KWあたり30,000円で上限105,000円を補助

## ■事例見学会～山武市新泉の中村宅～

会場から300mの所で「山武杉を使った住宅」「共同太陽光発電プロジェクト」「薪ボイラーで不要木材で風呂や暖房をまかなう資源循環ライフ」を実践している中村宅を見学した。



## WO-un(ヲ・ウン)

「森の遊び方を考えるあたらしい林業」

わたしたち WO-un は 千葉県山武市を中心に 遊び心ある「林業」をしています。かつて林業で栄え「山武杉」というブランド材も輩出した山武市内には 今でも多くの杉の森が残っていますがそのほとんどが、文字通り陽のあたらぬ場所になっています。そんな時代にわたしたち Wo-un が森から産み出しているのは「木材」だけではなく「新たな遊び」です。

例えば、森で音楽祭をしたり、アウトドアフェスティバルを開くお手伝いをしたりしてします。

「森遊び」を盛り上げる、とっておきのオリジナル道具（山武杉製のライブステージやゲルテント、椅子など）をつくったりもします。これは、森での「体験」や「思い出」といった決して「消費されないもの」を産み出す林業でもあります。

## ■小型林業機械の開発

山武地域の林地に適した小型林業機械(ウィンチ等)の開発。

### ○軽トラウィンチ

軽トラックのタイヤをウィンチに付け替えて、走行の力を利用して木材を引っ張る

### ○ATV ウィンチ

四輪バギーをつかってシャフトにウィンチを設置して、走行の力を利用して木材を引っ張る



### ■森のウェディング

森の中にウェディング会場を用意し、自然素材をふんだんに使った結婚式をプロデュースする事業。



### ■森の遊び道具

間伐材を有効利用し、建物や遊具等を開発・制作する事業。  
間伐材の径に合わせた活用法で、無駄を出さずに最後まで「使い切る」物づくり。最後はエネルギー。



## 第3分科会のまとめ

山武市で活動する、里山資源を使った住まい・生活・なりわい・祭り・遊びなどの事業を紹介し、参加者の皆さんには里山資源の利用について多くの関心を頂きました。

普段フィールドで行う活動については写真や言葉では伝わりきれない部分もありましたが、会場から300mほどにある中村宅での、地元山武杉を使った家の見学および共同太陽光発電プロジェクト、不要木材をもらってきて薪ボイラーで給湯・暖房をまかなう仕組みの紹介では、興味を持って頂いてたくさん質問を頂きました。

山武市だけではなく日本全国で地域の木材が使われなくなり、林業が衰退しつつある中で、森林を健全に保っていくためにも森林整備をしないで荒廃が進んでしまう現状が広がっています。今こそ、林業や地元産の木材利用について考え直し、様々な角度から里山資源の有効利用するための活動が求められています。

山武市では、そのための市の施策が進められつつありますが、まだ市民レベルへの浸透は少ないのが現状です。「さんむ木づかいネット」や「Wo-un」のような市民が参加できるような活動を市民が実践することで、里山資源循環の推進を底上げする事になる。最終的には市民一人ひとりが持続的に里山資源の循環に関わるような習慣が根付くことで、持続可能な循環社会が実現できると考えられます。

この分科会では、その目指す姿の一端を、2つの活動報告から参加者と共有できました。

## 第4分科会 「子どもと共に味わう里山の自然と恵み」

- コーディネーター 中村俊彦
- 発表者 渡辺章 野口よしこ
- 主催団体 「宇宙あそびむら」 「ドロリンピック委員会」
- 内 容

## 宇宙あそびむら の紹介



場所 山武市下横地 代表 渡辺 章 創設 1991年4月

対象 3歳から就学前まで <定員 5歳児 20名 4歳児 20名 3歳児 15名>

手作りログハウスの園舎。自然の丸太の遊具。いすや人形など、園内のほとんどが園児や保護者、スタッフによる手作り作品。

## あそびむらのコンセプト

<p><b>生命をはぐくむ</b></p> <p>羊・うさぎ・犬・鳥たちと共に暮らす          小さな命の誕生にも 出会う          稲や野菜を育て 成長と実りを喜ぶ          それは 私達の命につながる          あそびむらごはんは 畑の野菜がたっぷり          化学添加物なしの手づくりお昼ごはん          子どもの心と体を守り はぐくむ</p>	<p><b>つくる</b></p> <p>つくってあそぶ つくってたべる          これは あそびむらの大切な心          紙工作・木工・木版画・羊の毛刈り・紡ぎ・染め・織り          感性を豊かにする自然の素材を用いて          子ども達の手から生まれる          かけがえのない作品          ものづくりのよろこび</p>
<p><b>自然からまなぶ</b></p> <p>毎週の遠足 野山を歩き 木や草や花や実に出会う          美しい四季のめぐり 豊かな自然の恵み          小さな虫からも 生命をまなぶ          土も水も ともだち          泥んこあそび・水あそび・プールあそび          思いっきり 体を動かす          自然からもらえる しなやかな心と体</p>	<p><b>表現する</b></p> <p>おもしろくって 楽しくって 笑った          悲しくって くやしくて 泣いた          自分の気持ち 自分の言葉で          音や音楽であそぼう          色やかたちであそぼう          お話の世界であそぼう          うたって踊って          生きる喜びの表現</p>

◎里山シンポジウムに教育分野として、どうかかわるか

自然体験活動を教育の大切な部分として取り組んでいる「宇宙あそびむら」の活動

- 命の不思議、すばらしさ、大切さ、を言葉だけでなく、体で味わう
- 生活をとりにどす。便利な生活の時代で、少なくなった手作業、労働、あそびをとりにどし体験する。
- 私たち人間は、たくさんの命に囲まれて、その中で共に生きているという実感を少しでも感じて、成長していってもらえれば。

そのためには、実際に命にふれる体験をすること

小動物、虫、草木などと、ふれあう。食べて味わう、触って感じる、においをかぐ、よく見る、聞く、そして、なんだろう？、おもしろい、おいしい、変だな？すごい！・・・など、いろんなことを感じる。

あそびむらの実際の活動

◎毎週金曜日は遠足

木の実、草の実、野の花、虫、小動物、などと四季折々に出会える場所に出かけて行き、食べたり、触ったり、捕まえたり、遊んだり、・。

生の自然に触れる体験をできるだけ多くして、多くの感触を体にしみこませてもらいたい。



(山道を歩く)



(野いちごを食べる)

◎田畑での体験

畑で野菜を育てる、収穫して、食べる。たんぼで、田植え、稲刈り、わらの工作。



(野菜の苗を植える)



(さつまいもの収穫)

◎山野草で遊ぶ

生活のグループの名前は、野草、木の名前。たんぼぼぶえ、たんぼぼかんむり、くさぶえ、たけのこぶえ、むしかご、つるかご・・・。



(たんぽぽかんむり) (はっぱのお面)

(山野草のかご)

### ◎動物とくらす

うさぎ、ひつじ、いぬ、にわとり、小魚、ざりがに、かぶとむし、・・・。



(ひつじの毛刈り)

(遠足で、出会ったへびを、首にまく)

### ◎土や草木で遊ぶ



(どろんこのふる)

(木の枝や葉で作った隠れ家)

### **ドロリンピックの紹介**

平成19年より開始 5月4日に田植え前の田んぼで、思いっきりドロだらけになってあそびます。自然の中で、遊ぶ機会の少なくなってきた子どもや大人に場所を提供し、山武市内の仲間や城西大学の学生や消防団員の方々のボランティアの協力で行われています。山武市内だけでなく、遠方からも多くの参加者があり、どろの感触をたのしんでいます。

## ドロリンピックでの様子



(はじめは、おそろおそろ)

(どろんこソリではしりまわる)

## □分科会の話し合い

## ●山武市や他一般での教育分野での取り組みはどういう状況なのか？

○個々の教育現場での違いはあるが、自然体験教育を重要視しているところは、少ない。

理由は、その環境を準備するのがむずかしい、めんどろ、ある程度リスクを伴うこともある、など。

## ●大人がどうかかわったらよいのかわからない。

○大人自身が楽しむことが大事。教育現場では、子どもたちに伝えることと、同じように保護者にもその楽しさを伝えることに力を注ぐべき。

## ●親たちは、なかなか、忙しい状況なので、祖父母たちのかかわりも大切だと思う。

## ●小さい子どもたちの自然観察会への参加を増やすには、どうしたらよいか。

○家のまわりでの歩いていける範囲での自然環境が少ないのが現状ですが、そういう場所を見つけてやるというのも、大人の役割だと思う。

## ●都市部に比べれば、山武市などは身近に良い環境がまだ、たくさん残っている。そういう場所を、もっと、個人や家庭や行政が積極的に利用し守るよう働きかけることが大切。

## ●今回のシンポジウムで見聞きしたことは、素晴らしいと、思っている、でも、すぐ、忘れる。ぜひ、自分で、動いて、体験する機会をもってもらいたい。

## &lt;コーディネーター 中村俊彦 まとめ&gt;

今の子どもたちは3間がない、といわれている。空間・時間・仲間。つまり、それをする環境、すなわちゆっくりとした時間、楽しめる仲間。それらを、取り戻してやるのは、大人の責任である。子どもたちは、その3つがあれば、なんの指導をしなくても、本能的に動き始める。動きはじめれば、あとは、じっくり、見守ってやればよい。

今の教育現場では、自然体験教育が、おまけのようになっている。遠足や自然観察など、形は様々だが、一部分のお楽しみ程度に扱われている。または、理科の学習の一部分とか。

子どもたちが成長していくとき、自然体験が、重要な意味を持っていることを、考えてほしい。自然体験をたっぷりして育った子どもは、豊かな発想力を持った人になる。それが、豊かな社会につながる。

今ある少ない里山の自然を守り、育て、もっと、豊かなものにするには、どうしたらよいか。今ここにいる、一人一人が、考え、小さな実行をすることが、その一歩になる。子どもたちと共に味わい、感じ、考え、実行しましょう。

## 第5分科会「耕作放棄地から谷津田・里山林を元気にしよう！」

■コーディネイター 佐藤 聡子

■主催団体 NPO 法人バランス21

■内 容

### 報告1・耕作放棄地は開墾から・・・

5年前、農業をやったことが無いのに?!  
無謀にも谷津田再生に挑戦しました。

10年くらいほってあったのかな?ヨシ、ガマ、クズの繁茂との戦いでした。

2011年1月4日から始まり、お弁当持参で、(土・日)協力者が集まってくれました。

みんな、黙々と草刈りをしていました。クズの根っ子のはびこりには、驚きました。

NPO法人の登記もそこそこに、阿部さんの指導で「いのちの壺」と古代米(黒米・緑米)の種まき、育苗、目を見張るばかりの挑戦でした。みなさんすごい!6月には、田んぼになり、水回りも工夫され、イネはすくすくと育ち、田んぼに繁茂した草取りに汗を流し、9月には収穫が出来た時には、感動しました。

この頃から千葉自然学校シニア大学で学ばれたみなさん、農業試験場の研究者、斎藤さんがシフトしてくれて、谷津田は、着々と整備が進みました。堂谷津の池まで、ヨシやセイタカアワダチソウの繁茂は、なかなか手強く大変でした。千葉県「耕作放棄地ボランティア草刈り隊」が手をつけられなかった奥まで、刈ってくれたのがきっかけで、谷津田の全貌が見えて来ました。千葉県環境財団の支援を受けてビニールハウスも設置出来ました。村落持ちの放棄されていた堂谷津の池の調査も進み、田んぼへの水回りも研究され、(故)岩澤信夫さん研究の「冬期湛水・不耕起栽培」無農薬、無化学肥料の実践をはじめました。人々の力が集まるとドラマも生まれ、「良い場所を作ろう!」を目標に谷津田は、明るさを取り戻し、生き物や眠っていた植物達も、花の色を見せ始めました。里山林の斜面林の草刈りが進み、野草の群落があちこちに見られ感動しています。更に見つかる気配です。

子ども達も田植えやオタマジャクシ、ザリガニ釣りにやって来るようになり、谷津田は賑やかになって来ました。カエルの声も!野鳥の鳴き声も!かしましく、里山環境の再生は、ちやくちやくと進んで来ました。今度は、再生した環境を生かす活動が、はじまりました。





ヨシの群生する田んぼは、初めの年は、草刈機で、3回・4回刈り取りに挑戦していました。マムシにも出会い、カヤネズミの子育てが終わり、茅で編んだ巣も見かけました。クズが田んぼにはびこり、こんなにも根を張っていることに驚きました。ガマも繁茂していました。



放棄地も、力が合わさると1年目から田植えが出来、「いのちの壺」コシヒカリの異種と古代米（緑米・黒米）が立派に成長しました。休耕田は、「1年目は美味しいお米が取れるよ！」「谷津田の米は美味しいよ！」農家さんに教えてもらいました。そっと、注目されていました。



千葉県環境財団の環境再生支援金で、自分たちで、ビニールハウスを手づくりして、設置しました。水路は、1m づつ落ち葉をかき出し、ついに流れを繋げました。やりましたね。

## 報告 2 ・ 谷津田再生を楽しむ・・・

田植えをイベントとして楽しんでもらうことになり、埋立地で自然の少ない浦安市のみなさんが田植えにバスで、100人くらいやって来た。谷津田は賑やかな田植えになった。

田植えの後は、オタマジャクシやザリガニ釣で大騒ぎ。稲刈りも来たいということで、秋にもやって来た。田んぼで転んで何回も着替えをする子も、この日は許されているようだ。

網を持って、畔を歩く子ども達は、目が爛々として誰もがうれしそうだった。結構みんな、上手に田植えもしてくれていた。3年目になるとかなり、慣れた手つきで、頑張っている。その後、

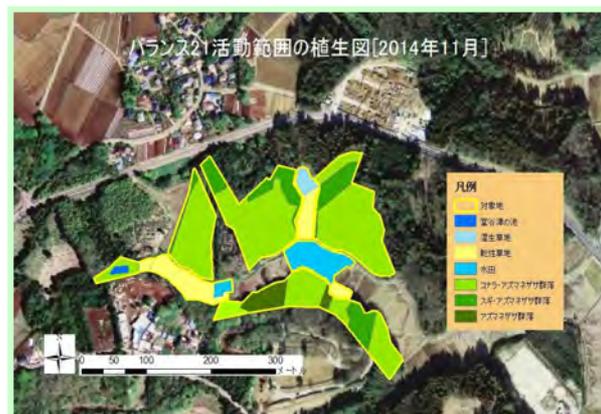
夏休み自然観察会を計画するようになった。やっぱり、ザリガニ釣は、人気があり、大人達も夢中になる。茹でましたが、みなさん、

食べるまでには？勇気がいるようだった。

4年目から千葉市の観光協会の広報誌「千葉あそび」を見て、親子で60人くらいやってきた。子ども達に自然体験をさせたい父母は、多くなって来た。延べ250人の田植えになった。

千葉市と地権者、NPO 法人バランス 21 との活動協定を2014年10月に結べたことで、谷津田周辺の里山林も散策できるようになりました。

しかし、長年、手入れがされていない山は、アズマネザサ、アオキの繁茂でジャングルようになっていた。杉木立も溝くされ病で何時、倒木するか解らないという。昨年、また、千葉県環境財団と JT の助成事業の助成を受けて20本伐採しました。ニホンアカガエル、サワガニ、サシバ、フクロウも観察、スマイレの群落、クマガイソウも若葉をそっと見せました。里山を元気になると、地域も元気になればいいなあ！



## 第6分科会「台湾里山事情」

- コーディネーター 風間俊雄 劉 淑恵  
 ■主催団体 台湾国立高雄師範大学地理学系  
 いちはら里山クラブ

### ■内 容

最近の台湾里山事情の一つとして、農産品と農地の問題に関し、

- 高齢化・若者の転出、農地転用（自給率低下）
- 食の安全性の問題（農薬問題）に対して、国民の82.2%の人が不安を感じている。
- 輸入品への懸念（主に中国本土から）（農薬使用食品）
- 土地価格の世界比較で台湾が最も高い

等の案件が話された。但し、分科会報告の限られた時間（6分間）での話題提供ではタイトルの大きさ重さで、発言者も十分な話題提供が出来ず、聴取者も講話がよく理解できず消化不良気味であったと思う。



(シンポジウム会場にて)

上記を勘案し、代弁者（風間俊雄）が何度か台湾との交流を通じて感じたことを（台湾里山見聞録？）と称して纏めてみる。（この件に関しては、あくまでも私見であり、又、案件に関して、劉 淑恵 副教授に確認済である。）

**国際交流の経緯：** かつて農業立国であった台湾も近年工業立国に様変わりし、環境問題、自然破壊等々の諸問題が深刻化している。COP10以降、台湾も生物多様性の重要性が見直されてきている。そこで台湾の学者者・有識者・行政担当者等が、この件では先進国である日本の実情を視察に来た。視察団のメンバーは、台湾国家公園（日本の国立公園）・国家自然公園の重鎮、行政の中心担当者、学究者（台湾国立高雄師範大学教授他）社区（台湾の地域コミュニティ）等であった。2013年8月に茨城、神奈川、千葉3県を視察し、その際我々の活動場所を視察し、それが縁で国際交流が始まった。



(いちはら里山クラブ・古敷谷)



(視察団一行)

台湾も各地（社区）で、環境保全活動・町おこし運動・生物多様性戦略を推進しようとして、各種シンポジウムが開催されている。

2013年12月に（高雄市 美濃区）で「2013 農村願景会議（従里山倡議看農村興自然的共生対話）」というシンポジウムが開催された。ここに我々が招聘され千葉県での現状を披露する機会を持った。



(2013 農村願景会議)

このシンポジウムで特に感じたことは、写真にあるように参加者の皆さんがとても若い人たちが多かったこと・・・若者たちが危機感を持って、「何かしたい・・・」との思いが強い表れと感じられた。

これを機に、台湾国立高雄師範大学を中心として、小さな国際交流の場が出来た。師範大学の学生さんたちがインターンシップとして、何度か我々の活動場所にも来日し、里山保全活動体験をしている。劉 淑恵副教授は台湾の里山保全活動にも精通しており、元千葉中央博物館副館長の中村俊彦氏とも交流し、中村氏の資料を参考として（看見・台湾里山）という本を執筆発行している。又、台湾の自然科学系雑誌社（経典）が里山問題の特集し、関東各地の里山取材した。我々の活動場所にも来場し、取材を受けた。併せて台湾の里山（浅山）を掲載し、記事にもなった。（2015.4月号）



(書物の表紙)

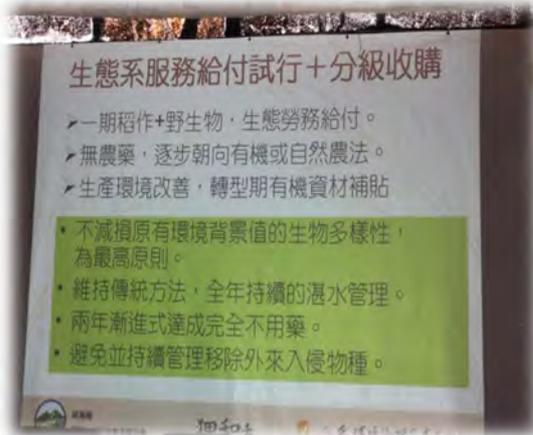


インターンシップ記念栗植樹

2014.11.22栗植樹（古殿谷）

(台湾インターンシップ記念植樹)

**台湾が抱えている諸問題：** 前段の劉 副教授の講話にもあるように、工業化に伴う農地の転用、若者の転出、農薬問題、高齢化、他により、住民たちの意識変化（農村維持への無関心）が進行している。これらの諸問題は台湾政治の政策によるものとの指摘をしている人たちもいる。しかしながら、社区が学究者等と連携しながら「何とかしたい・・・」との思いから自主活動を始めている。日本での（里山）は台湾では（浅山）と位置付けている。人と生物が共存出来る環境づくりの先輩国（日本に見習え・・・）との思いも強く、行政の仕組み・実際の活動状況等を参考に勉強を始めた。



(活動事例)



(台湾の里山保全活動例)

**台湾と日本の活動内容の相違点：** 日本での活動は、そのほとんどが一般市民のボランティアである。（一部指定管理者方式もあるが・・・）又、我々の活動地はそのほとんどが民有地であり、行政指導の下、地主協定等によりその活動が一定期間担保されている。ボランティア構成員も日本は第三者の集まりでこれを構成している。

他方、台湾は民有地の割合が少なく、行政（内政府、地方役所）の土地が多く、活動の実施に制約がある？

又、活動そのものも、家族・親族単位が中心で実施（自分の土地、身内の土地）狭範囲での活動が多いと思われ、広範囲での活動が難しい？

**活動への思い：** 日本では活動のための各種支援がなくてもそれぞれの思いで活動しているので、継続性が保たれる（楽しんで活動？）

台湾ではどうか？（資金援助がなければ活動できないのか？）疑問ではある。いずれにしても、これからの台湾も環境保全、里山保全活動が活発化し日本と同様な環境づくりが出来てくるのでは？と期待している。

**台湾の地域特性：** 台湾は面積が日本の九州とほぼ同じである。

その中で海拔 3,000m を超す山脈が 250 座以上ある。気候も南の地方（熱帯気候）から北の地方（亜熱帯気候）と幅広い気候帯であり、急峻な山脈によって構成されている。

里山（浅山）の部分より、（奥山）の範囲が多いと思われる。多雨のため土石流災害も多発し、それを防ぐため？人工の構築物（コンクリート構築物）が多く作られ、今まで生息していた生物が住みにくい環境が多くなった。



(台湾の山系)



(棚田)

台湾は現在日本では見られない多民族で構成されており、先住民（原住民）、本省人（福建系・客家系）、外省人（戦後本国から来た人）等が微妙な関係を保ちつつ、独自の文化と伝統を今もって守り受け継いでいる。



(先住民 パイワン族)



(伝統文化)

劉 淑恵 副教授は自著（看見・台湾里山）の中で、台湾の里山を（山林里山、台地里山、谷間里山、平原里山）里川を（里川）里海を（里澤、潟湖里海、沙濱里海、珊瑚礁里海、岩礁里海、礫石里海）と分類して、それぞれ台湾の地区を当て嵌めている。さしずめ千葉県は谷間里山、平原里山に価するのでは？と考える。

又、台湾の農業発展歷程期として、史前時期を混沌期、日治時期を黄金期、二次戦争時期を破壊期、戦後を回復期～停滞期、1986年以降を農業現代化時期、2002年以降をWTO適応期と称している。台湾もここ数十年前までは以前の日本の自然風景が見られたことと思う？今まさにこの急激なる環境変化に戸惑っているのではないだろうか？

前述の日治時代を黄金期と称していただけること、日本人として嬉しい限りではある。私も今まで、二度ほど訪台したが親日家の皆さんに歓迎していただいたことに感謝の念を禁じえない。これからも小さな国際交流を大切に深度化していきたいと願っている。

## 映画上映会

### 1. 木を植えた男

#### L'Homme qui Plantait des Arbres

1987年／30分

監督・脚本：フレデリック・バック

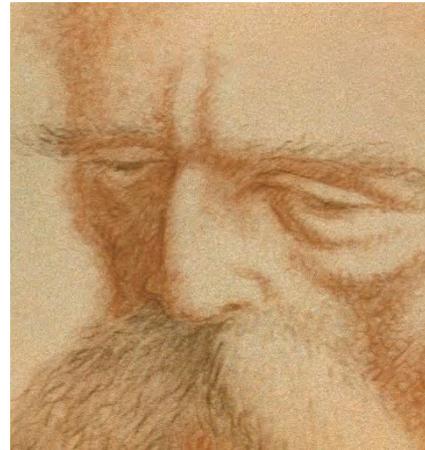
原作：ジャン・ジヨノ

撮影：クロード・ラビエール、  
ジャン・ロビニヤール

音楽：ノルマン・ロジェ

プロデュース：ユベール・ティゾン

声の出演：三國連太郎（日本語版）、  
フィリップ・ノワレ（フランス語版）、  
クリストファー・プラマー（英語版）



20世紀初頭のフランス・プロヴァンス地方。荒廃した山岳地帯となっていたこの地をさまよっていた「私」は、そこでひとりの羊飼いと出会った。彼——エルゼアール・ブッフイエは、数年前からこの地にどんぐりの種を土に埋め、木を育てており、その無償の行為に、「私」は深い感銘を受ける。その後、第一次世界大戦が勃発し、数年後に再びこの山岳地帯を訪れた「私」の目の前に広がったのは、美しい緑の木々だった。数年前は完全に失われていた緑が蘇っていたのである——。

### 2. クラック！

#### CRAC！

1981年／15分

脚本・監督・原画：フレデリック・バック

音楽監督：ノルマン・ロジェ

台詞なし/字幕なし



1982年 オタワ国際アニメーションフェスティバル グランプリ受賞、アカデミー賞短編アニメーション賞受賞。

フレデリック・バックの長女、スーゼルのアイデアをもとに、一脚のロッキングチェアがめぐる運命を通じて、失われつつあるケベックの伝統的な生活や文化、自然への共感、現代文明批判などを描く。ツヤ消しセルに色鉛筆で描く全作からの技法が、物語や表現とマッチして、高い評価を得た。アカデミー賞短編アニメーション部門受賞。

## 「Present Tree for さんむ日向の森」について

認定 NPO 法人 環境リレーションズ研究所 平沢真実子

プレゼントツリーは「人生の記念日に樹を植えよう！」を合言葉に、大切な人や自分自身のために記念樹を植えて、森林再生と地域振興につながるプロジェクトです。都市の人びとに苗木の里親になってもらい、その苗木を介して縁のできた中山間地域との交流人口を増やすことによって、森だけでなく地域も元気にしていきます。



認定 NPO 法人環境リレーションズ研究所（東京都千代田区）が運営し、スタートから 11 年目を迎えた今現在、国内外 24 ヶ所で活動しています。植えた苗木には 1 本 1 本ナンバープレートが付けられ、10 年間森になるまで大切に育てます。苗木の里親になった方には、ナンバープレートの番号が記された「植林証明書」と贈り主からのメッセージカードが届きます。

山武市にある「Present Tree for さんむ日向の森」は、活動地のひとつです。2011 年 6 月 30 日、山武市と地元森林整備機関、環境リレーションズ研究所で 10 年間の森林整備協定を締結しました。

このプロジェクトが実現したのは、2011 年～2012 年に国内 3 ヶ所で開催された「木を植える男～フレデリック・バック展」がきっかけです。東京都現代美術館での展示企画・デザイン担当の増田様と、プレゼントツリーの活動にご賛同いただいた「さんむフォレスト」稗田様のご縁が、この素晴らしい取り組みへと導いてくれました。

当地では、松・サンプスギの「二段林」の復活など先人の知恵を未来へつなぐ試みも含め、里山の自然循環の要としての森づくりを目指しています。人と森との関わりを体験する里山活動の拠点となることを願い、里山の四季を愛でる花の咲く樹、鳥や動物たちの集まる実のなる樹、シイタケの原木や薪炭になる樹などを植えています。

2012 年 3 月には植樹イベントが開催され、山武市長はじめ市内外からの約 150 名の参加者が、サンプスギや、ヤマザクラ等の広葉樹計約 1,500 本の苗木を植えました。当地に植えられた約 4,000 本の苗木は、里親の皆さまに見守られながら、今もすくすくと生長を続けています。

※プレゼントツリー公式サイト：<http://www.presenttree.jp>

※Present Tree for さんむ日向の森紹介：<http://www.presenttree.jp/lineup/lineup13.html>



## 基調講演

## F・バックさんが伝えたかったこと

スタジオジブリ 高畑勲

バックさんは四十歳を超えてからアニメーションを作り始めたんです。しかもテーマはすべて環境破壊に警鐘を鳴らすことと、自然との共生を訴えることでした。要するに、そのテーマを分かりやすく伝えるために、アニメ作家になったんです。それも素晴らしい自分の絵で。

実は『木を植えた男』のDVDに関してはいくつかお話しておくべきことがあります。一種の注釈といえますか、この映画が単なる感動ドラマなんかではなくて、あり得べき事実に基づいた、いわば空想的“ドキュメンタリー”なのだ、ということをおさえておきたいのです。



「木を植えた男」は、ジャン・ジヨノという作家が書いた小説で、映画のナレーションはほぼ原文通りなのですが、DVDの語りは三国連太郎さんは素晴らしいのに省略も多いし誤訳もあります。ジヨノはこのお話を実話なのだと偽り、人に信じ込ませようとしたんですが、バレてしまう。そんな人物はいなかったと。でも人を騙そうとするには非常なリアリティが必要です。徹底して堅実にリアリティを追求して、細部までこんなことがあっても不思議はないというものを書いた。ひょっとすると、今これを聞いてショックを受けた方がいらっしゃるかもしれませんが、実話だと信じていて。——実は、僕がそうだったのです。それほどリアリティがあった。

まず、植える木ですが、「カシワ(柏)」と言っていますが、原文はフランス語で「シェーナ」、英語で言えば「oak」です。オークは、ヨーロッパの人々にとって非常に大事な木です。自然を象徴する大樹。ところが有用なために大航海時代の造船以来、このオークを使いつくしたんです。今、例えばイタリアではオークの伐採は禁止されている。要するに、ほとんど減んでしまった。ですから、伐採を規制し、時間をかけて大樹を育成しなくてはならなくなったわけです。

この映画でなぜオークを植えるのか、これでお分かりと思います。そのオークをどう訳すか、これがやっかいなのです。オークとは本来ドングリのなる木の総称で、常緑のものもあるのですが、大樹のいわゆるオークは落葉広葉樹です。逆に日本で大事な木とされるのはブナ科コナラ属の中では、常緑のカシです。里山の雑木林のクヌギやコナラ、あるいはカシワやミズナラなどの落葉する木よりカシの方が堅くて締まった木なので、木材として格が高い。ですから、オークをカシと訳した方がその精神的な意義を伝えられると考えて、明治以来、モーツァルトの『魔笛』の笛なども樫の木で作ったと訳されてきました。でもやはりそれはおかしい。オークは落葉樹なのだから。今では総称の「ナラ」と訳すことが多くなっていますが、落ち着かないんですね。

物語の中で、ナレーションが「溜め池を掘らなければいけなかった」と語るところがあります

が、溜め池はおかしい。雨水を溜める天水槽のことなんです。水は雨水に頼るしかなかった。それが、森がよみがえったことによって小川が流れ始める。森の保水力のおかげですね。古代ローマ時代の小川の痕跡があった。そこに涸れていた水の流れが復活したということなのです。

それから、途中で視察団が来ます。彼らは天然林だと思って来るのですが、そこで一つだけ有益なことを決めました。「木炭バーナーの禁止」と語っていますが、これも誤訳で、炭焼きを禁止したのです。木を伐採して炭を焼く、その炭焼きを禁止したんですね。しかし戦争が始まると伐採を始める。でも森が奥地過ぎるので中止となり、運良く森は護られるんです。

戦時中に伐採が行われたのは、炭焼きをして、自動車を木炭ガスで走らせなければならなかったからです。語りからその言葉が抜けています。僕は、太平洋戦争のとき子どもでした。ですから実際に見て知ってるんですけど、日本でも木炭自動車というのが走っていたんです。石油の輸入が止まったので、木炭を、いや木炭にもしませんでした。薪でしたね。薪を蒸焼きにして、バスを走らせていた。乗用車も、後ろの部分を壊して木炭ガス発生装置をつけていた。それはフランスでも同じだったんです。ついでですが、雑木林はシイタケのほだ木の為だけではありません。小枝は柴に、木は木炭や薪に、落葉は堆肥を作るため。伐採しても、切り株からひこばえが生えてまた成長してくれる。15年ぐらいでまた伐る。これを延々と繰り返す。それが雑木林経営の本来の姿なんです。フランスでも同様の使い方だったのですね。英語で *coppice* と言います。

それから南フランスの荒地です。香草といえばローズマリーやタイムやラベンダーですね。これらはみんな荒地に生えます。香りのよい植物や鮮やかな花が咲く灌木が生えるというのは、土地が荒れている証拠なんです。日本ではマツです。マツは荒地でも元気に生えてくる。海岸の砂浜なんかにも多いですが、砂地は非常に痩せた土地です。そこにもマツは植えれば育ってくれる。人間が使いすぎて荒らすと、そこもマツだけになる。そして、地味が豊かになってきて他の木々が生えてくると、やがてマツは負けてしまいます。海に近い山武市の話聞いたとき、植林地には、最初にマツを植えたと言うので、きっとそういうことなのだと思います。

南フランスは古代ローマの頃から非常に温暖な気候の場所でした。そこに多くの人が住みついていくうちに森が荒廃していった。土地を荒らしてしまったのです。ギリシャだってそうです。ギリシャの神殿は石でできていますが木造建築の形をしている。もとは木材を使っていた証拠です。梁にする木材が無くなった頃、ローマ時代にアーチが発明されるんです。アーチやドームというのは、石を積んで屋根をつくる。梁が要りません。大発明です。地中海から中東にかけてみんなアーチになった。しかしギリシャのパルテノン神殿なんかも、柱があって梁がある。木が豊かに生えていた証拠ですね。そして、それを使い切ってしまったということなのです。

それから、もう一つは羊です。やせ地だから羊を飼う。しかし羊を放牧してしまうと、もう森林は復活しません。主人公は始め、羊の群れを飼っていますが、森林が復活し始めたときに、羊は4頭だけにして、あとはミツバチを飼い始めるんですね。ああいう所が非常にリアルです。羊をそのままにしてしまうと、折角植えた木の新芽をどんどん食い荒らしてしまいます。だからミツバチに切り替えたわけです。そういう部分が非常に厳密に描かれている。

緑と水がよみがえってできた村落を語り手が目撃するところで、「ところがこのラザールの地は」と意味不明なことを言いますが、あれは聖書のラザロのよみがえりのことを言っていて、この物語のテーマが「よみがえり」すなわち「復活」であることをはっきりさせているのです。他にも「カナンの地」とか、キリスト教的な比喻もありますし、神がしょっちゅう引き合いに出さ

れるので、つい、この物語も神様を讃えているお話かと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、実はその反対なのです。神の摂理は、サイクロンを起こして充分成長した木々を打ち倒すときとか、主人公の植えた木を駄目にするためにしか働きません。そして、主人公について、「人間は破壊以外の領域でも、神と同じほど有能でありうる」とか、「神にふさわしいこの仕事を成し遂げた老農夫」と語るのです。要するに、神様に匹敵するようなことが人間には出来るんだという、これは人間賛歌なのです。森林が荒廃して荒地になってしまっても、木を植えることによって、緑がよみがえり、水が流れ始め、人々がそこに住めるようになる。「木を植えた男」には、人間が努力をすればそういうことが可能だという勇気づけの意図があるわけです。

ではなぜ、作者ジヨノは、この偉業をたった一人の孤独な男にやらせたのでしょうか。神にも匹敵する偉大な人物を勝手に作り上げて、それを礼賛する、などというのは、物書きとしてルール違反ではないでしょうか。木を植える男を冷笑していた村人達が、木々が繁ってくるのを見て、協力し始める、という物語の方がずっといいのではないか。そんなふうに思いませんでしたか。

僕が考えたことの結論だけ言います。ジヨノは、人々に実話としてこの物語を信じさせ、こんな人物がほんとうにいたのだ、という衝撃を与えたかった。そして主人公の高潔・寛大さに感動し、「復活」の可能性を信じた人々が、微力でも自分たちも力を合わせて、あのようなよみがえりの実現に少しでも役立ちたい、と行って行動を起こすはずだ。そうジヨノは考えて人を騙そうとしたのです。だから、まったく孤独の中で、誰にも知られず、たった一人で偉業を成し遂げる必要があったのではないのでしょうか。そうしないと騙せないから。

僕は今、79歳です。今年で80歳になりますが、僕が少年の頃、戦争で山は荒れていました。石油のかわりの松根油を取るためにマツの根っこまで掘り起こしてたんですから。終戦当時小学4年生でした。ですから、自分が育った岡山の山がどんなふうに変わってきたかよく分かるんです。昔、はげ山だったところに今は木が生えていたり、あるいは、素晴らしい松の山だったところが、今は手のつけられない雑木の藪になっていたりします。緑は増えましたが、手入れされていない緑、利用しようのない緑が増えているのです。

江戸時代が終わって明治に入ったばかりの頃、西洋人が撮った写真が何枚も残っていますが、鎌倉や瀬戸内なんかはびっくりするくらい荒れています。木々は少なくはげ山も多い。あの頃、なぜ荒れていたかと言うと、突然、人口が増え始めたからです。明治維新みたいなものが起こることを、なぜか人間は予感できるんでしょうか。江戸時代の末期から子どもを産み始めて、どんどん人口が増えていく。先ほども言った通り、燃料として有用なものは木しかないものですから、どうしても木を過剰に切ってしまう。それで山は荒れる。鎌倉の写真なんか見ると本当にびっくりしますが、今よりもずっと木が少ない。生えている木はせいぜいマツくらい、そういう状態だった。それから百五十年、化石燃料の輸入にすっかり頼って、燃料用には木を伐らなくなった。土地も肥えた。変な話ですが、それで非常に緑豊かな国になったんです。日本は災害こそ多発しますが、気候からすればやはり恵まれているんですね。先人の知恵も伝統も素晴らしい。ですから私たちが勇気をもって賢明に対処しさえすれば、杉檜の広大な植林地を生かすことも、里山の恵みを受け続けることも、要するに、自然とうまく付き合っていくことができるのではないかと思います。決して悲観すべきではない。

バックさんに頂いたものがあって、せっかく持ってきたんでお見せしたいと思います。バックさんはご自身が木を植える人なんです。今回のシンポジウムのチラシにも書いて頂いていますが、『かぐや姫の物語』もバックさんの影響を受けているんです。スケッチ的な絵柄とか動きとかですね。実はバックさんは重い病気になられていて、それでバックさんを励ますという意味もあって、カナダを訪れ、作品を見て貰いました。喜んでくれたのですが、残念ながら八日後に亡くなりました。その前、スタッフでバックさんに寄せ書きを贈ったとき、これを頂いたんです。作った人にバックさんが貰ったら嬉しいです。「バックさんを讃えて」と、ここに書いてあります。それをバックさんは私に下さった。これはアッシジの聖フランチェスコの像です。



僕の所には猫の額ほどの庭がありまして、庭木もあり、草花も植わっています。その中にこれを置いたんです。葉っぱ越しの日の光がここに当たって、まるで木の下にこの人がいるようなのです。犬を連れて肩に小鳥を乗せています。日の光が差すと、にっこりして見える。にこやかに、太陽の方に手を広げているんですね。それを、朝起きて表に出たときに見ると実に気持ちがいい。地面に置くのは申し訳ないように思うのですが、しかしぴったりなんです。こちらも、にこにこしてしまうような、生きてて幸せ、みたいな効果を発揮するんです。

このアッシジの聖フランチェスコとちょうど同じ時期に明恵上人という人がいました。京都の高山寺を開いた方なのですが、高山寺というのが非常に面白くて、今、東京では鳥獣戯画と高山寺展というのをやっていますが、鳥獣戯画だけでなく他の展示が非常にいいんです。明恵上人がマツの木の大きな株の上で瞑想をしていると、その上にリスがいて鳥が飛んでいる、そういう情景が描かれた肖像画があります。それから雄雌のシカや子犬の彫刻とか、素晴らしい物がたくさんある。まさに「鳥・虫・けもの、草・木・花」の世界でして、後で知ったのですが、実は高山寺とアッシジの大聖堂は、兄弟寺の契りを交わしているんです。

一神教というのは奇妙な宗教です。全ての存在は、神様に作られたということになっているんですね。それで神様が一番大事にしたのが、最後に作った「人間」なんです。そして、箱船のあのノア以後の人間に、万物を支配させる特権を与えた。そういう考え方のキリスト教の中で、アッシジの聖フランチェスコは、エコロジーの先駆者って言われているんです。

でもね、聖フランチェスコの「小鳥に説法」って、聞いた事ありますか。図々しいよね、人間が説法するなんて。鳥は鳥で気ままに飛んでいればいい。日本の考え方では、人間と対等なんです。アッシジの聖フランチェスコの祈りで有名なのは、「被造物たちの讃歌」なんです。その中で、太陽に「brother sun」と呼びかけるんです。「兄弟であるところの太陽」です。そして「sister moon」、「姉妹であるところの月」です。これも図々しい。日本ではお天道様、アマテラス、「大日如来」です。手を合わせてその恵みに感謝するような、信仰と畏怖の対象です。それが兄弟だなんて。気が引けるせいでしょうか、この祈りが日本ではなぜか「太陽の讃歌」と訳されているんですね。そういえば、聖フランチェスコを扱った映画の題名が「Brother sun & Sister moon」でした。これも僕は、図々しいんじゃないかって思っていました。

ところが最近、考えを変えたんです。神様が一番上に立って、その下で人間が全ての動植物を支配してもいいというのがキリスト教の考え方なのですが、しかしアッシジの聖フランチェスコは違ったんじゃないかと思うようになりました。神様が作ってくれたということ言えば、太陽も人間と兄弟関係ではないか。太陽みたいに立派なものじゃなくて虫みたいなものも全て、これも神様が作った被創造物です。神様が作ったものですから、すべて対等な立場なんですね。「兄弟」なんです。鳥も獣も人間の兄弟ですし、虫だって、まあ、西洋の人は虫なんてほとんど無視していますが、要するに神様っていう存在が上に乗っかっているだけで、全て対等な立場なんです。その中で太陽には一応一目置いているけれど、聖フランチェスコはやっぱり、人間が上に立って支配するというのではない物の考え方をしていたのではないかと思うようになりました。お日様に向かってこの像が手を広げているのを見ているとそんな気がする。エコロジーの祖かも。

「草木国土悉皆成仏（そうもくこくどしっかいじょうぶつ）」という言葉があります。草木と言うのは「草木（くさき）」。国土と言うのは「国の土」と書きます。悉皆とは、「ことごとく皆」。成仏というのは、「仏になること」。仏になるかどうか、そんなことは分からない。要するに、「仏になってもおかしくない命」という考え方です。動物や人間などの命あるもの、その上に草木があって、草木どころか国土



ってことになる自然物です。石ころ一個までもが命ある仏の様な存在であるという、すごい考え方だと思うんです。私たちは、自然を破壊して、ひどい状態を作ってきました。だからこそ今、皆さんはそれを何とかしようと努力なさっているわけですが、しかしそれに関わらず、日本にはこういう考え方が受け継がれてきたのです。むしろ仏教の方が、そういう考え方を取り入れたわけです。例えば、おやしろでは、御神体が石ころだったりします。奈良の大神神社なんて山が御神体です。そこに仏性を見るのです。仏様になってもおかしくないような「命」をそこに見るわけです。実は明恵上人も、愛したのは動植物だけでなく、島に向かって手紙を書いたり、石を集めたり。こちらエコロジーの祖かもしれません。今、日本は西洋以上にひどい状況かも知れない。だけど基本的には、日本にはそういう感じ方考え方があるのです。日本では、名字に「山」「川」「石」「鳥」「熊」など自然物が多い。「山」や「川」や「村」、それから、最近は少ないけど「しか」とか「うめ」とか。不思議ですね。そんなもの西洋では有りえません。人間中心ですから、名字や名前に草木とか鳥獣とかをつける様なことはない。隣の韓国や中国にもありません。こんなのは日本だけです。僕の孫は森介と山介といいます。この後、話をなさる稗田さんという方は、稗の田です。

長くなるので、とりあえずここで終わりにしたいと思います。

## ●高畑勲さんのプロフィール

アニメーション映画監督。1935年三重県に生まれ、岡山で育つ。1959年に東京大学仏文科を卒業。スタジオジブリで「火垂るの墓」(88年、第一回モスクワ児童青少年国際映画祭グランプリ)、「おもひでぽろぽろ」(91年、芸術選奨文部大臣賞、山路ふみ子賞文化財団特別賞)、「平成狸合戦ぽんぽこ」(94年、アヌシー国際アニメーション映画祭長編映画賞)、「ホーホケキョとなりの山田くん」(99年、いしいひさいち原作、文化庁メディア芸術祭優秀賞)などを作成。2013年には待望の最新作「かぐや姫の物語」が公開され、毎日映画コンクールアニメーション映画賞、ロサンゼルス映画批評家協会賞(アニメーション映画部門)等を受賞し、2015年、同作品は第87回 米国アカデミー賞長編アニメーション映画部門賞にノミネートされた。また著作には、ジャン・ジヨノの小説とそれに基づくフレデリック・バックのアニメーション作品に関する『木を植えた男を読む』(訳著)などがある。2015年4月には、フランス芸術文化勲章オフィシエを受章した。

## 戦争・国境・民族・民俗 ～バックさんの自伝を読んで～

高畑勲 Isao Takahata



これは、今から丁度12年前の卯年、2000年1月2日、バックさんから頂いたFAXである。帯紐にひと茎の草花を挿した風流兎が、兎の動画をせつせと筆で描いている。うずたかく積み上がった動画、わきには硯。まさに『鳥獣戯画』から抜け出したばかりのアニメーターウサギだ。

この楽しい戯画は特別に日本のアニメーション関係者向けに描いてくださったようで、その月末に頂いたお手紙には、別のこんなカードが同封されていた。



投げ上げた懐紙が白鷺となって飛び去るのは北斎漫画の「手妻」、こちらは、新たなミレニアムを迎え、今度こそ世界中の戦火がやんで軍備の要らない平和な世紀になるようにという、バックさんの切なる願いが込められている。

バックさんは『木を植えた男』によって人々の心の中に木を植えたアニメーション作家であると同時に、活動的エコロジストである。美術家・イラストレーターとしての様々な業績を重ねた後、四十代半ばで本格的なアニメーション制作に乗り出すのだが、その第一作からすべて、自然と人間との関係、人の営みと環境をテーマに、その調和を訴え、文明の行き過ぎに警鐘を鳴らすものだった（『クラック!』では、原発が人々の運動で美術館へと生まれ変わる）。そしてみずから木を植え、ミツバチを飼い、菜食し、先住民に学び、動物愛護や反公害など様々な活動に参加してきた。

こういう諸活動のための絵やアニメーションを見ると、ときに、これがあの温厚なバックさんの描いたものか、と驚かずにはいられない激しさがあって、そこにバックさん自身の現状に対する深い悲しみといきどおりが込められていることに気づく。そういうバックさんが、平和に関してもメッセージを出されているのだと知ったのが、2000年のこの賀状だった。バックさんはこのほかにも、“Love & Peace”を標榜する広島アニメフェスティバルやアムネスティ（人権擁護活動）のポスター、アニメーターに向けてのメッセージカードなどを描いている（「もしきみが平和をのぞむなら、どうかアニメーションで平和を用意してほしい。きずなを結び、愛し、理解するために作られるアニメーションで！」）。

バックさんと戦争。すぐには結びつかないかもしれない。しかし、戦争や地域紛争は人命を奪い、生活を破壊し、自然や動物をも壊滅させる。そして核兵器を頂点とする近代的軍備と、世界中に蔓延しきった銃器こそ「文明の行き過ぎ」の最たるもの。バックさんがそれを憂えて当然だ。いや、それどころか、じつは、バックさんにとって、戦争と平和は、生まれながらにして切実な問題だったのである。今回、娘シュゼルさんが立ち上げたホームページ「ともに行動しよう」に掲載されている「自伝」を読んで、私はそのことに思いをいたさないわけにいかなかった。

まず生まれたのが母の故郷、独仏国境のザール・ブリュッケン郊外。ザール地方は石炭の産地で、もともとドイツ系だが、ルイ14世に

征服された歴史があり、当時(1924年)は第一次大戦の戦後処理で国際連盟管理地区としてフランスの影響下にあった。そして1935年、住民投票が行われ、ナチスの激しい宣伝もあって圧倒的多数でドイツに帰属。自伝の「両大戦間のアルザス」の項には、「ルイ14世の征服以来、ザール人は、“半フランス人”と呼ばれていた。ザールの人々がフランスに留まる気をおこすために、フランスはほとんど何もせず、何ひとつ真剣な努力をしなかった」と書かれている。第二次大戦ドイツ敗北によって1947年からフランス保護領となるが、1956年の住民投票によって再びドイツに復帰、現在に至る。

バックさんが子ども時代を過ごしたのは、ザール地方に近いアルザスの中心地ストラスプール。アルザスもまた、もともとはドイツ系の土地だが、鉄鉱石や石炭の産出地で、17世紀以来、戦争のたびに独仏が奪い合い、隣のロレーヌとともに何度もフランスとドイツの間を行き来した。一家が住んだのは、第一次大戦の結果としてフランスが取り返して間もない時期。小学校の先生は、有名なドーデの『最後の授業』のフランス人愛国教師(1871年普仏戦争敗北でドイツ領となり教室を去る)とは正反対の、アルザス人分離主義者(ドイツ寄りの独立論者)だった。1940年フランスに侵攻したドイツは、アルザス・ロレーヌを併合するが、1945年ドイツ降伏により両地域は再びフランスに帰属。以来、それまでの数奇な運命を逆に生かして、ストラスプールは今ではヨーロッパ統合(独仏協調)の象徴的な都市へと発展している。

それより前の1937年、13歳で一家はパリに移り、バックさんは工芸学校に入る。1939年第二次大戦が勃発し、一家はプルターニュのレンヌに避難、バックさんはレンヌの美術学校に入り直す。アルザスにいた親戚は、第一次大戦同様、戦場になる可能性が高かったので(『木を植えた男』の「私」が戦ったロレーヌのヴェルダンはその最大の激戦地)、家財や農地・家畜を捨てて逃げなければならず、もつと大きな苦難に見舞われた。

1940年5月、ドイツの侵攻により、フランス軍は敗走、たちまち降伏する。アルザスは今度は戦場にはならなかったものの、ドイツにとっては占領ではなく「奪還」だから、バックさんの従兄弟はドイツ軍に徴兵され、命を落としたし、ドイツ領ザール地方に残っていた親戚は、それ以前からすでに「敵」となっていた。

ドイツ侵攻時にはレンヌ駅でも爆撃によって多くの死者が出た。フランスの敗北でプルターニュもドイツに占領され、ユダヤ人の先生と

級友が連れ去られた。占領下のレンヌで、バックさんは美術学校の大先輩、生涯の師と仰ぐマチュラン・メウ先生に出会い、その教えにしたがってプルターニュの民俗を記録しようと励んだ。今度は連合軍による爆撃があり、バック一家を含め、レンヌはしばしば大きな被害を受ける。その後、占領地のSTO(強制労働任務)という制度によって、ドイツの工場に行き働くことを要求されたバックさんは姿を隠し、近郊農村の司祭にかくまってもらって、そこで天井画など宗教画を描いたり雑用をしたりした。

ドイツの敗色濃い1944年に入ると、レンヌも他のプルターニュの都市同様、イギリスから飛来する連合軍側の空爆が激化する。占領地であるが故に、味方にまで破壊され殺傷されるとは何という不運だろう。そしてそのひどい結果を、占領からの「解放」のために喜ばなければならぬとは、何と耐え難い矛盾だろう。連合軍によって破壊し尽くされた同じプルターニュの軍港都市、プレストの廃墟の街に立って、「枯葉」の詩人プレヴェールは「なんてくだらないんだ、戦争は!」(「バルバラ」と怒りを吐露したが、その歌曲は放送禁止となった。戦い続けるべき“正義の戦争”は終わっていないからだ。

バック青年は「代母」一家の対独レジスタンス活動を支持していたし、むろん「解放」を喜び、自由フランス軍に入隊しようとさえしたけれども、「解放」直後田舎で目撃したことを後にこう書かずにはいられなかった。「戦車やキャタピラー車がいくつも黒焦げになり、教会や村は廃墟だ。おぞましくも馬鹿げた戦争、またもや!」(自伝)

レンヌ中心部もまた、退去するドイツ軍によってすべての橋を破壊され、廃墟と化した。バックさんは子どものときからトライリンガル(仏語と独語とアルザス語)だったが、英語も父から手ほどきは受けていて、「解放」後、米兵との接触でそれは生かされた。

バックさんの母は、戦中のレンヌでドイツ軍の捕虜として働かされていたコートジボアール兵たちに食べ物を与え、親切にした。黒人兵が戦前から、「祖国フランス」(!)防衛のために、遠く離れた西アフリカより動員されていたという事実、この事実そのものにひそむ理不尽さに、バックさんは鈍感ではいられなかった。仏語で「象牙海岸」を意味するコートジボアールは、戦後15年後の1960年に独立するまで、フランスの植民地だった。

1945年、フランス「解放」の翌年、ドイツと日本が降伏して第二次大戦は終わる。バックさんは、固有の言語・文化・民族を無視して引かれる国境や国籍がいかに不条理なものかを、そしていざという

とき、国家というものがまったく当てにならないことを、22歳までに身にしみて悟った。バックさんが経験し目撃したことは、兵士として、あるいは住民として、戦争でどれほど悲惨な目に遭ったかというのは、また別の何かだ。それは例えば、帝国主義的支配が周辺に引き起こす苦難だ。そしてこれは戦後の引揚げ者以外、日本人にはなかなか考えの及ばない問題である。私たちは、朝鮮半島等々の人々に似た苦難を押しつけてきたにもかかわらず、その歴史を忘れて単一民族神話の中にぬくぬくと生きている。

ここまでバックさんの父方のことについては触れてこなかったが、じつはこれまた日本人にとっては驚くべき経歴である。すなわち祖父はドイツ領デンマークの出身、祖母はチェコの出身でソルボンヌ卒、二人はロシアのペテルスブルクで知り合い、パリで婚約、ベルリンで結婚。ドイツで生まれた父は音楽家となり、七カ国語を話し、指揮者の職を求めてスイスなど各地を転々、その間にザールで結婚してバックさんを生み、フランスに住み、バックさんがカナダに移住した二年後、同じケベック州に楽長職を見つけて妻とともに海を渡る。父の家系はまさにコスモポリタン、意志的に国境の枠にとらわれずに生きるには、平和は必須条件だ。

バックさんにとって、戦争と平和、さらにはヨーロッパ統合などの問題がいかに切実なものでありうるか、それは、ここまで語ってきた生いたちをみれば容易に納得できるはず。冷戦が終わったのに、かえって局地的な紛争が激化する現状についても、バックさんは私たちよりずっと敏感なのではないだろうか。

1948年、バックさんはビザ無しで、絵を入れたカバンと自転車だけを持ってカナダに渡る。なぜカナダに定住したのだろうか。それは、文通相手だった妻ギレーヌさんとのロマンスを抜きには語れない。モンリオールに着いて、三日目には求婚したのだから。また、あまり間を置かず美術教師の職を得たことも幸いした。しかしなによりも、カナダが多民族国家として、諸々の歴史のしがらみから自由な新天地になりそうだったことも大きな理由ではなかったろうか。カナダは、いまや、人種や民族のモザイクとよばれるほど雑多な出自の人々が集まり、文化の多様性を許容し尊重する国となっていて、例えばモンリオールには30近い民族の出身者が住んでいる。先住民に関しても、過去の同化政策を謝罪し、その文化をカナダ人みずからのアイデンティティの柱の一本として位置づけようとしている。

カナダの公用語が英仏二語で(1969年以来)、標識なども両語併記であることは知られているが、じつはそれは、バックさんが住むケベック州のためなのだ。カナダに最も古く入ったのはフランス人で、『大いなる河の流れ』の“主人公”たるセント・ローレンス河沿いに入植し、いまのケベック州中心にカナダの原型をつくった。そしてイギリスに支配されてからも、ケベック州は、常にその独自性を主張・維持しようとしてきており、いまなおこの州での公用語はフランス語だけである。

揺り椅子の一生の物語である『クラック!』には、ケベックの伝統的生活が情緒豊かに描かれていて、そこにフランス起源の童謡のメロディーがちりばめられる。ケベック州にフランスの文化が受けつがれているからだ。たとえば男の子が釣り糸を垂れて靴下の魚を釣っていると「小さなお舟があったとき」が、そして紙のカブトをかぶり揺り椅子を馬に見立てて騎士ごっこに興じていると「マルブルーは戦争に」が流れる、というように。子守歌のように歌われる歌の歌詞もフランス民謡「雨だよ、羊飼いの娘さん」、ただしその美しいメロディーはおそらく新作。

そして『大いなる河の流れ』を彩る美しい歌もまた、「澄んだ泉に」という、よく知られたフランス民謡なのだ。映画冒頭にメロディーが流れ、人間と大河がうまく共存していた時代の場面で子どもたちが第一節を歌う。この歌はケベック起源とも言われ、事実、18世紀ケベック州で大流行したらしい。そしてクレジットタイトルに第一節がもう一度流れる。

澄んだ泉に／散歩に行つて／水があんまりきれいだから／ぼくは水に身を浸したよ…

ついでながら、と言うには重いことだが、このエンディングについて、「タイトルバックではなくて、もつとちゃんと聞かせたかったのに…」と、バックさんはおっしゃっていた。よみがえった魚たちが群れをなして、一瞬、冒頭に現れた象徴的な「大いなる河の顔」をもう一度かたちづくる。本来の大河の姿を取り戻したこの感動的な映像に、

ずっとずっとぼくはきみを愛してきたんだ  
これからもぼくはきみのこと決して忘れないよ!

と、この歌のリフレインが愛しげに大河に呼びかける——というのがバックさんの本来の意図だったと思われる。それが、アニメ映画祭出品に向けた追込み作業のどさくさで指示どおり伝わらなかったのだ。

大河の歴史を振り返ることは、結果的に河川汚濁への道を一方的に辿ることにならざるをえない。それは絶対に必要なことだが、どうしても観客の気持ちを重くしてしまいがちになる。それだけに、未来の改善への希望を力強く指し示すこのエピソードが手違いのために実現しなかったことは、ほんとうに残念でならない。

さて、ケベック州は前述のように、カナダという国家の中でその文化的・言語的独自性を失わないでいるけれども、じつは、州民は中央政府を牽制するために、しばしばカナダからの分離独立をちらつかせてきたのも事実なのだ。一国のなかに様々な民族(言語・文化・宗教)をかかえていることは、一つ間違えば紛争の「火種」になりかねず(ボスニアの悲劇!)、多様性をただ素晴らしいと言っているだけでは済むまい。多様な文化伝統を尊重し合い、調和を図るためには、忍耐強さが絶対に必要だろう。

『クラック!』にはひとつ興味深いことがある。それは、「生まれたての赤ん坊はインディアンが連れてくるんだよ」という、移民の子どもたちに言い伝えられてきたことを、ある種の差別意識だったとして隠す(取り上げない)のではなく、楽しい過去の伝承としてそのまま映像化していることだ。バックさんは、早くから先住民の文化に関心を持ち、交流もあり、作品に反映させただけでなく、自然と共存し、生きた痕跡を残さない生き方への共感さえ表明している人である。赤ん坊届けのエピソードを描くことは、私には差別どころか、現在、先住民との間にわだかまりがない証拠ではないかと思える。

娘シュゼルの思いつきから発し、ケベック育ちの妻ギレーヌさんの協力があって『クラック!』は生まれた、とバックさんはおっしゃっているが、じつはこういう民俗(生業・風習)をしっかりと記憶にとどめよう、という関心が芽生えたのはずっと昔のことだ。バックさんが育ったのは、アルザスとブルターニュという、フランスの中でも独自の風俗・文化・言語を保持しているきわめて地方色豊かな土地である。両地域ともに、まさに、「私たちは自分たちの時代の証人にならなければならぬ、益々早く変化し姿を変えていく世界について、観察しうるすべてを描き留めておかなければならぬ」(自伝より)というメウ先

生の教えを忠実に実行するには絶好の場所だった。そしてバックさんはそれを、カナダで就職した後も、世界各地を旅行しながら続けたのだった。(米林宏昌監督の『借りぐらしのアリエッティ』には、小人・妖精文化の故地アイルランド風のハーブが鳴る。作・演奏のセシル・コルベルさんはブルターニュの人。じつは、ブルターニュはもともとブリテンから渡ってきた人々が住み着いた土地で、アイルランド同様、ケルト文化を色濃く残しているのだ。なお、マチュラン・メウは1914年日本を訪れ、その時描かれた様々な絵が、2004年『ブルターニュの画家、日本を旅する』として出版されている。これらは絵画としての価値だけでなく、その時代の日本の記録として大変貴重なものだ。)

バックさんが描いたスケッチ・エチュードの膨大な量には圧倒される。しかもそのスケッチでは、様々な絵画スタイルが試みられていて、メウ先生の「原画を売るな。インスピレーションの源泉として、また将来のための参考として保持せよ!」(自伝より)の教えどおり、その探求を、壁画やステンドグラス、戯画、テレビでの即興的な仕事、そして偉大なアニメーション映画と、現代的で普遍性のある多様な作品に生かすことができたのだった。

私はいま、有能なスタッフと組んで長編アニメーション映画の制作に励んでいる。私たちは『ホーホケキョ となりの山田くん』以来、新たな表現スタイルを探求してきた。それを勇気づけてくれた「先達」のひとつが、何を隠そう、バックさんの『木を植えた男』だった。スケッチのように捉える、描きたいものしか描かない、人物が配置され、行動すれば、そのまわりに空間が立ち現れる、などなど。

私はフレデリック・バックさんを、我が師、とあがめている。

#### Profile

1935年、三重県生まれ。アニメーション映画監督。東京大学を卒業後、東映動画へ入社。1968年の『太陽の王子 ホルスの大冒険』が初監督作品。おもな監督作品は『アルプスの少女ハイジ』、『母をたずねて三千里』、『赤毛のアン』、『ジャリン子チエ』、『ゼロ弾きのゴーシュ』、『火垂るの墓』、『おもひでぼろぼろ』、『平成狸合戦ぽんぽこ』、『ホーホケキョ となりの山田くん』など。また、ミッシェル・オスロ監督のアニメーション『キリクと魔女』の日本語版翻訳・演出、『アズールとアスマール』の日本語吹替版翻訳・演出も手がける。著書として、『映画を作りながら考えたこと』、『映画を作りながら考えたこと』、『十二世紀のアニメーション』、『話の話』(徳間書店)、『漫画映画の志一「やぶにらみの暴君」と「王と鳥」』(岩波書店)などがある。訳著『木を植えた男を読む』(徳間書店)では、ジオノの原文と日本語訳、詳細な作品解説、来日時の対談などが掲載され、バック作品の背景や思想などをより深く知ることができる。

## 鼎 談 「受けつごう、「木を植える心」とくらし」

高畑 勲 (スタジオジブリ)

椎名千収 (山武市長)

稗田忠弘 (さんむフォレスト代表)

## 稗田

それでは始めさせていただきます。

先程プレゼントツリーの説明でもありましたように、2011年のフレデリック・バック展（東京都現代美術館）がご縁で、私たちさんむフォレストというグループで「山武杉の日」というイベントをさせていただきました。そのイベントに付けたテーマが「木を植える市民になろう」でした。そんなに深く考えて付けたテーマではないんですけど、『木を植えた男』のアニメーションを何度か見させていただいて、きょう高畑さんがおっしゃったように非常に勇気づけられる、心を奮い立たされるような、人間てすごいことができるという、そんな思いにさせてくれるアニメーションだったんですね。それで、「木を植える市民になろう」という、みんなでそんな市民になろうよというようなことをテーマにしてシンポジウムをやったらいいかなと思ったんです。

その後、景観条例策定（山武市）の時にも委員に加えていただいて、その度にいろんなことを考えるんですけど、景観条例で形や色はこうでなくてはいけない、というようなことをいくら言ってみても縛れるものじゃない。景観というのは人の心がつくる、そういうものだというように、考えるほどに思えてきたんですね。

私たちさんむフォレストでやっているのは、山武杉を使って家をつくり、残った木は全部エネルギー利用して灰になるまで木を使いきる、そういう仕組みの中で暮らして行けたら山林も再生するし、美しい森もできるんじゃないかと、そんな運動をしているんですけど、今の自分たちだけではなくて、次の世代のことを考えられるような心というのが「木を植える心」というものじゃないかと思ったりしています。今日の「子どもにつなぐくらし方」というテーマもそんなふうに決めさせていただきました。

私はそんなことを市民活動としてやっていて、山武市さんには活動の後押しをしていただいて、本当にありがたいです。市長は幅広いところから山武市を見ていられて私みたいに木ばかり見ているわけではありませんが、まちづくりでは共通するものがあるように思います。市長から何かお話しただけですか。

## 椎名

皆様こんにちは。私はあまり長くしゃべらないように、高畑先生にできるだけ長くお話いただくのが良いかと思いますが、今、稗田さんからお話しいただきましたように、山武市としては市民の皆様方と一緒にまちづくりを進めています。ということは、私が直接やっていることというのはほとんどというか、全くございませんで、どなたかにやっていただいている。まちづくりの直接の活動というのは、市民の皆様方が本当に熱心にやっていただいていることに



よってまちが出来上がっていると理解させていただいております。

今日の『木を植えた男』もそうですが、何を考えているかというよりは一つのことをどれだけ長く考え続けられるか、それを行動できるかというところにすべてのまちづくりがあるように思います。それと、稗田さんには山武市になる以前から山武杉についてお話を聞かせていただいております。ずーっと後に育った木でこの地域にくらす人の家を建てる、木は使い切る、そのお話は常にいただいております。この方は本当にそれを一つしか言いませんので、このことだけでもすごいなあと、この前もお話ししましたけれども、本人はそう思っていないらしいのですが私は尊敬いたしております。素晴らしい活動をされている、そんな風に思って、皆様とともに里山の大事な木を守るということについてこれからもお願いしたい。私ども行政というのは非常に非効率的な組織の中で、職員一人一人が一生懸命やろうとしている中でも、仕組みの問題で皆様のご期待にお応えできないことがあります、皆様の考えていらっしゃることを行政は、邪魔しないというか、皆さまがお考えのとおり動いてゆけますことを目指すということが山武市の今の姿勢でございます。



## 稗田

非常にありがたいお言葉と思います。尊敬だなどというお言葉は身に余ります。行政って大変難しいと思うんです。人も変わりますしね。理念としていいものがあったとしてもそれを全員が共有することがなかなかできなくて、一部分を担うという仕組みになっちゃうでしょう。だから、いつも思うことは、遠くの方にでっかい真っ赤な太陽みたいなものをしっかり見て、こんな市になりたいと、みんながそういうものを心の中に見て行けるものが本当にほしいなと思うんです。

資源循環という言葉は一般化したし、日本中でやっています。ただ、どうも手段になっているというか、僕らみたいに山武杉で家をつくる、残ったものはエネルギーに使いますというのはわかりやすいんですけど、これがまた度がすぎればまずいですね。山武杉が足りなくなっちゃうということもあるわけで。自分たちの足元にある資源というものが、何を自分たちが持っていてどう暮らしていったら次の世代にちゃんと渡して行けるのか、ということを皆が分かるということがすごく大事だと思うんです。それを行政の一人一人にというのはなかなか難しいとは思いますが、だけど行政だったらできると思っているんです。というのは、せっかく市長さんはじめ皆さんが山武市は資源循環で、山武杉で建築をつくろうとってはくれるんですけど、なかなか実現しない。うまくいかない。これはやっぱりやり方、仕組みの問題なんだろうと思います。

## 椎名

行政というよりは政治家としての力が足りないというご指摘なんで、そういうことだと思うんです。行政というのはおっしゃるようにバランスを兎に角とってゆかなければいけないという事になりますので、あまり偏りは出来ないという、本音として私はそういう風に思います。自分がしっかりどちらの方向を向くかという事についての、皆さん方への提案努力、そのところがまだ不足だという事になるとは思いますが、しっかりこれから勉強させていただきます。

## 稗田

高畑さんから今のことについてお話しをいただけますか。

## 高畑

いろんなところでいろんな努力がされていらっしゃるわけだけど、僕なんかはその、全国にもものすごい杉、昔は無かった杉林になっていて、今や悪玉になっている印象があるんですけど、実際に全国を旅すればすぐ分かる。杉だらけで。僕が学生の頃、拡大造林というのがありまして、昭和30年ごろですか、そのときに落葉広葉樹を伐って杉を植えた。植えた杉なんて面倒見られないほどたくさん植えた。で、結局どうなったかという、もう荒れた杉だらけです、全国で。これについてどうするのかというのは、さっきの話とはだいぶ違う。さっきというのは『木を植えた男』とはものすごく大きな違いがある。いっぺん荒地になったところを、何百年、何千年かかってもいっぺん復活させようという、しかし、その復活がそんなに時間がかからず復活できたという話であって、本当にそんな事ができるかどうか確かに怪しい側面も無いわけではないんですけどね。山武杉とかそういうのは入らないんですけどね、普通、いま里山というのは言葉が分からなくなって、何でも里山なんだという感じがするけど、もともとの里山って何だって言うと、要するに村をつくって人が住んで、多くの場合谷津田も含めて水があって田んぼもつくるけど、背中には自分の建物を建てるための杉なんかも植えるけど、基本的には奥山と違う生活圏に雑木林をつくる。その雑木林が非常に役立つ。その雑木林というのがそれこそたった10年か15年くらいで伐っても循環できるんですね。非常に上手に循環できる。そういうワンセットなんです。それをせまい意味の里山と。

しかし、今話を戻しますけど、山武杉もそうでしょうけど、全部植えてしまった杉、これはこれとして循環させるしかない。杉ってどうするんですか？家を建てる。面倒を見て使えるようにして、伐ってまた植える。これは雑木林よりもっと時間が掛りますけど。それをやれば日本では可能なわけですね。可能にするとはどういうことかという、使わなければ話にならないでしょう。日本にいっぱいあるのに、外材なんてバカなことは無いんです大体が。よその土地を荒らしてね。日本の山で手に入れたらいいわけで、間伐材も使えるわけですよ。そういうことにしてしまえば。拡大造林というのは、あれは国の施策として日本中でやって、たとえば九州の山奥の五木村というところへ行って話を聞くと、“オレなんかもおかしいと思ったんだけど”って言うてるんです。要するに“杉ばかりつくってしまうことをおかしいと思ったけどなあ”と。やれって言うし金も入るからやったと。

だから今度は同じように木を使うことを国の施策として打ち出すべきなんです。どんどん使えばいい。コンクリートで木に似せた柵なんか作ったりバカなことしているわけですよ、今。あれを木でやればいいじゃない。間伐材でも何でも。朽ちたら朽ちる頃に取り替えればいいわけでしょう、新しく。どんどん消費しなくちゃいけない。建材でも燃料でも、いっぱい消費するところはある。それが日本の規準になれば誰も疑わなくなる。昔、木はダメでコンクリートはすばらしいという事を誰も疑わずにですね、コンクリートだったら千年ももつんだと錯覚して、コンク



リートばかりやってきた。

だけどそれは疑わなかったからあんな事ができた。だけど木は疑われてどうにもならないものだと思われて、使われないですね。木を使うものだと思えば良いんです。あの、たとえばヨーロッパへ行ったりするとイタリアでは全部敷石です、相変わらず。アスファルト道路は少ない。もちろん幹線道路は別です。街中はみんな風景を守って、イタリアは観光立国ですから。全部



石工がきちんと、石をコンコンと割ったりしながら全部もう一度元に戻すんです。こんな事をするくらいなら、便利さから言えばアスファルトにしちゃえば良いんです。日本の観光地なんて化粧敷石舗装以外、みんなそうしちゃっている。実際、僕は岡山出身ですけど、倉敷なんか非常に面白い道の作り方をしていたんですが、そんなの全部なくなってしまってアスファルトにしちゃった。でもそうしないことに意味があるという事になれば、この場合、木でも石でも割って敷けば、それが当たり前になってゆけば、放置している杉林だってちゃんと手入れするだろうし。そっちのほうに向かうはずです。

しかし、これは大きい事で言えば政治の政策そのものを転換、国土保全の一つとして森林政策を転換させなければならないでしょうね、たぶん。それをちゃんとやってくれないと、僕はダメだろうなという気がする。概略こう思っています。

## 稗田

国も今、小規模な建築は木造でできるものは木造でやりなさいと法律までつくって、仕組みはつくっているんですけど、なかなか思うようにいかない。構造計算をするときには日本農林規格の何等級だったら強度はこうだというような、数字がないと行政が認めない。でも、昔から地元の人たちは木を見て判断できる力量があるんです。それを鉄やコンクリートと同じように等級付けて扱うというところに大きな問題があって、小さな地方の林業にはつらいところです。せめて山武杉なんかは、山武市の建築は山武杉で山武市の等級で良いというくらいになってもいいんじゃないかと思っているんですけど、これはなかなか難しい話です。

(会場の小学校について)実はこの建築は私が設計させていただいたんですが、ごらんのように山武杉が何処にもないんですね。山武市に当時から住んでいながらそういう資源循環という意識というのは全く持っていなかったというのが正直なところです。そういうことが分からないんですよ、そこに根を張って生きて見ないと。自分がそこで生きてみて初めて、自分と一緒に隣に生きる人たちの暮らしと自分のつくるものとの関連性があるという事を考えなければいけなかったんだと気づくのですが、当時からそういう意識を持っていればもっともって地元に貢献ができたのになという思いが強くなります。

話を戻して、僕らの世代はいっぱいツケを残したまま生きてきたという思いが実はあるんです。僕は独立した当初から、本当に建築家というのは加害者だという意識がすごくあったんです。シックハウスなんていうのが問題になって、新築した家に住み始めたら病気になりました、とか、合併浄化槽から建築が出来るたびに汚い排水が流れるというようなこと、基礎をつくるのに、穴を掘って残土処理をする、それから掘ったあとを埋めるのに山を崩して砂を持ってくる。そういう加害者になるような仕組みになっちゃっているような気がするんです。今だったら山を崩して砂を持ってこなくても、そこにあるもので埋めてもいいんじゃないかとか、そういう判断が出来るような気がするんですけどもね。どうもそういう思いがずっとありました。そういうことからシックハウスにならないような健康的な住まいをつくりたいと思って、それに併せて山武杉で地元の山林再生につながるような仕事をしたいなと思ったし、地元で修行をした大工さんが存分に腕を振るえるようなそういうものにしたいなと思って、それが今につながっているわけです。

後世にツケを残さない生き方というのがとっても今大事な気がするんです。たとえば 3.11 の福島ですね。どう処分していいか分からないような危険物をたくさん抱えながら便利さを追ってきたわけですから、そうじゃない生き方があるんじゃないかと思って、そういうことから地元の木をエネルギーにまで使うという、そういう仕組みづくりを思わされるわけですけど、実際それだけでは足りないんですよ。いくら残材をエネルギー利用しますよといっても、一軒家をつくってその残材で薪ストーブを焚けるのは、せいぜい一年分くらいですから。次から次とそういう循環が出来てゆかないとそういう仕組みは出来ないんですけど、高畑さんから、後世にツケを残さない生き方ということについて何かありますか？

## 高畑

だから、我々の世代というか、我々の上も含めてですけど、すごいツケをいっぱい残しちゃったんですね。高度成長に入る前と戦前とそんなに違いがない。だから非常に緩やかだったんですね、生活の仕方というのは。それが劇的に変わったわけです。それって簡単に引き返せないですね。しかし、引き返すためには、エネルギー問題もそうですが、要するにどこかで決断するしかないんですね。決断できると思うんです。たとえば原発は要らないといって、決めちゃえばいいわけです。で、それとの付き合いは廃炉にするだけでも大変な事なんですから、ずっと付き合う、どうしても。しかし、どちらにしてもエネルギーが足りないなら足りないままで生活しようってことに。そういう部分で、すごいツケを子孫に残すかもしれないような核エネルギーは使わないと決めてしまえばいいんです。確かに今のような自由主義経済の中で決める事ができないという事はあるかもしれないけど、しかし、それは日本の民主主義の程度です。ドイツは福島の実験でもう原発はやめると決めて、いま四苦八苦してるじゃないかとフランスが言って、原発をやったほうが良いと言っているけど、そういう四苦八苦することをしないと話にならない。四苦八苦して、切羽詰まって、代替の自然エネルギーなりなんなりを必死になって開発しないと。核燃料でやる間は代替エネルギーの開発は進まない、実際進まなかったでしょう、日本では。太陽光であれなんであれ。それは「苦しいとき」ってのが必要なんじゃないかなという気が僕はしますよ。



## 椎名

私の昔の職業が油屋ですので、もうちょっと若い時代、ローマクラブというエネルギー問題に見識のある人たちがいて、その当時から化石燃料の環境問題を自分の中で強く考えた。そのときから原子力というエネルギーにある意味期待、希望を持った世代なので、簡単にあきらめると言うのは抵抗があることはあるのですが、今日の事故を受けて制御が出来ない、まあ普通の火だったら燃料が無くなれば燃え尽きるということがありますが、これが無いので非常に困った問題です。先生のおっしゃるように、使わないなら使わないと、そこから出発が出来るかどうか、ものの考え方が出来るかどうかだと。やはりもう孫や子の時代にこれ以上住みにくい世の中を渡すわけにはいかないという考え方を我々とらなければいけないと、特に、地域をどのようにこれからつくっていくかという中では非常に重要なことだというように思います。で、それがどういう世の中かという、やはり、子どもを産んでもらえるような、希望を持って子どもを産んでもらえるような、生まれてよかったという時代にならなければ、と思っていますので、そういった意味ではしっかり取り組んでゆかなければならないと思うんですが。

私、一つ、何か考えるときに、たとえば今日は里山です。資源循環とか里山とかで、高畑さんおっしゃったように、たとえば里山でも大きな捉え方と小さな捉え方と、その捉え方によってはもつ意味が全く違うわけであって、里山ならすべていいというものではないというような、どこかに少しひねくれた批判学みたいなものを残しておかないとですね、皆が同じ方向にワッと行き、ダメだとなるとワッとこうくる。これを繰り返していたのではいけない。今流行の言葉を受け入れるのはいいけど、どこかに本当にそれでいいのかという何か、こう、自分の中で検証する気持ちというのが絶対に必要だろうというふうに思っています。

一つの事例として3.11の津波があります。大槌町では、あれだけの防波堤を作っても津波に乗り越えられてしまいました。あの時から、とにかく海岸に堤防を作ろうという話になりました。しかし、これには、本当にそれでいいのかという議論が必要です。百年、千年の問題ですから、色々な考えがあっていい。みんなが同じ方向に考えを揃えてしまうと、危険である。一人一人が自分の感覚をしっかりと築き上げていかななくてはならないと思います。



## 高畑

津波のことは、被害者の方々に寄り添おうと思っても、被害者の方々の中でも意見が分かれているので、寄り添い方が非常に難しいです。それで、堤防に関してちょっと思うのですが、世の中には、とにかく高い堤防を作ろうという意見があります。公の場では、ここで初めて発言します。失礼ですが、僕は、バカなことだと思いました。大津波は既に来たんです。だからこれから、あんなに大きい津波は直ぐには来るはずがない。それなのに堤防を作って、景観も何も変えてしまう。国が予算をつけるので、やってしまうということで、高い堤防を作って海を見えなくしたり土地のかさ上げをやっているけれど、僕はおかしいと思う。どうしたって、波に乗り越えられてしまうかもしれないんです。低い土地には、低い土地が持っている魅力が本来ある

んです。ですが、そういう場所では一旦津波が来たら危険です。そういう時、どうしてきたかという、これは、これだけ無常観が発達するくらい繰り返してきたんです。みんな、津波を忘れまい忘れまい、風化させまいとしているけど、日本人は、過去の津波をどんどん忘れてきたんです。そうじゃないとやっていけないんです。

では、どうしたらいいかと言うと、津波が来ても、本当に残るに違いないというような頑丈な避難用の建物を建てる。それから防災です。津波が来たら、ここに逃げるといふ場所を作る。あとは、低い所は低いままでいいじゃないか。大事なものは別の場所に置くなりして、津波が来てしまったら、もうしょうがない、被害を受け入れるということです。避難さえすれば人間は死なない。家はだめかもしれないけど、大事なものは残る。特に被災地では、そういう経験をしてきた。しかし殆どのところでは、そういう対策をしてないですね、全然。まずは、そういう建物を作るべきです。「そこに駆け込めば、絶対に命は助かる」といふようなものを。

巨大堤防や土地のかさ上げや、スゴい物を作るために、町や集落の復興が遅れていることが現在の一番の問題だと思っています。「ふるさと」といふのは親しんだ景観と共同体のつきあいです。景観を失い、ご近所さんはバラバラになってしまった。戦後復興のようにすぐやればよかった、と僕は思っています。「仕方がない」といふのは、被害を受けた人に申し訳ないので、とても言えないことですが、避けられないものは、しかたがないと思わないといけない。そうやってきたんです、人間は…。極端な意見かもしれませんが。

## 稗田

本当に、おっしゃる通りという気がします。日本人は、自然の災害は有るものだと受け入れながら、凌（しの）いできたんですよ、きっと。それを、今は自分の力で何でも解決できると思っている。これは驕（おご）りなのかなという気がします。そう言ってしまうと、被災地の方々に本当に失礼になってしまいますが、何か、あまりにも過信しているというか、自分が正しいと思いつんでしまっているというか…。

アメリカの超高層ビルに飛行機が突っ込んで酷いことになったけれども、その原因をきちんと考えずに、被害を受けたらそれに勝る方法で解決しようというの、やっぱり、ちょっと驕りなのかなという気がします。

しかし、そういう風に割り切って、日本人の暮らし方を変えるといふのは、相当難しいことでしょう。今、高畑さんがおっしゃったように、そういうものなんだという風に、割り切って諦めるといふのは、中々できることではないと思います。市長はどう思われますか。



## 椎名

今回、これだけの津波被害を受けて、国が復興の予算をつけてかさ上げなどをやっていますが、必ずしも、国の側でそれを推奨してきたとは、私は思っていません。例えば、私ども地方の側が声を上げる際、私のような立場ですと、住民の声を無視できない。これは日本人の情緒性にも関

わってきます。恐らく、ヨーロッパ的なものの考え方と東洋的なものの考え方、そこに違いがあるんじゃないかと思います。特に日本では、政策を立てる時に、感情論というか情緒というものをどうしても排除できない。本当に考えていったときに、これでいいのかというような、今、おっしゃったような方向に舵を取れないというのが国の立場であります。それで、これの繰り返しをしていくということになります。もっともっと自然と共に生きるのが、本来の人の生き方だという事をおっしゃる方もいらっしゃいますが、国の政治としてはそういったことをやらざるを得ないということを、現実問題として私は感じております。

## 高畑

そう言われますが、国は、さっき言いましたけれども拡大造林であれ、石炭から石油へであれ、ドラスティックな政策をやったのけてきたでしょう。それから、今の政治でもすごい大転換をしようとしているじゃないですか。安倍さんが。あんなことが許されてしまう。それでいけば、真に国民のためになる施策ならば、国とか政府とかが決断すればやれるはずだと思うんですよ。国民の顔色ばかりを見ていて、身動きが取れないという訳でもなさそうなんです、政府は。

## 稗田

すごく面白い話になりそうなんです、あまり突っ込むといけないみたいなので、もう、そろそろ終わりにしたいと思います。さっき、資源循環がすごく大事という話がありました。しかし、その資源循環も、度を超すと資源循環でなくなってしまうかもしれないという感じもしました。「それが、本当に正しいことか、そうでないことか」を測る物差しが、どうも必要じゃないかと思う訳です。僕は、それは「持続可能性」ということに尽きると思っています。「この方法ですっとやってゆけば、自分の子ども達や孫にも、ちゃんと今まで通り、若しくは今よりもいいものを渡してゆける。」そういう仕組みだったら僕は正しいと思うし、「このままやっていると、ツケがたまりそうだな」というようなことだったら、やっぱり駄目だということです。

本当にこの方法がいいかどうか迷った時には、これは持続可能かどうかといった秤に掛けてみるのが一番わかりやすいと思うのですが、どうでしょうか。

## 椎名

私は、ごあいさつの後にも申し上げたのですが、資源循環を考えたときに、バイオマスについてたくさん資料をいただいたのですが、その中で感じたのは「循環は自然に起こらない」ということです。ちょっとご想像いただきたいのですが、水平なフラフープみたいなものに水が入っていて、これがぐるぐる回る。それを単に水平に置いておいたときに水がぐるぐる回るかという、回らない。水が回るためには、水の位置エネルギーが上がってそこから低い所に落ちるという風にしないといけない。循環するためには必ずどこかで持ち上げなくてはならない。循環とは、閉鎖されたものに外から何らかの形でエネルギーが入って持ち上が



るというような作用が必要だと思います。

例えば、エネルギーの自然循環では、太陽エネルギーが外から入りますが、それをもっともっと効率よくするために、化石燃料を燃やしたり原子力を使って一気に持ち上げたりしてきたのが今の世の中のしくみだと思います。このように、何か一つの方法で画期的にエネルギーを獲得しようとする考え方が、やはりこの世の中を作っているように思います。今、里山シンポジウムで皆さんが考えられているようなことは、恐らく資源循環をみんなの努力で少しずつ色んなところで持ち上げるということだと思います。例えば何かでポンと一気に持ち上げるような資源循環を考えていると、これまでと同じようなことになってしまうのではないかと思います。

## 稗田

市長の、そのテーブルの上の水を回すのは、ポンプなんかで上げるのではなくて人の思いが渦を作るんだという風に思うんです。

## 高畑

なかなか、思いだけでは上手くいかないですよ。循環するかどうか、サステイナブルになるかどうかということを、よく考えなくてはいけない。日本の場合もし尿処理の見事さが身近にありました。し尿は大事な肥料でした。し尿処理は食物連鎖的な循環を作るわけです。くみ取り便所はイヤでも、その循環システムを現代化して生かせないか。

昔の生活、江戸時代までにやっていた生活の中には、そういうものの目がある。それをもう一度再現できるか、できるだけ少ないエネルギーでもっと便利に、循環を可能にできるかどうか。その目で再検討したほうがいいと思うんです。里山はそういったところが素晴らしいんです。基本的に里山は、自給自足によって何百年だって何千年だって続くシステムなんです。しかし、そこには人力も必要、何も必要ですし、そこで得られるものとは、今みたいに贅沢なものではないですけど、しかしもう一度再検討し直すということが大事なんじゃないかと思います。

## 稗田

日本は、せっかく江戸のいいモデルというものを持ってるわけですからね。その通りだと思います。

本当に、あと1時間くらい、しゃべっていたい感じなんですけど、そうもいきません。鼎談ですから、当然、尻切れトンボで終わることを勘弁していただきたいと思います。

実はここでもうお一人、フレデリック・バックさんにゆかりのある、素敵な方をお迎えしていますので、ご紹介したいと思います。西村由紀江さんです。どうぞ。

## 西村

ずっと舞台そでで聞かせていただいていたので、私がここに入っていいのか、恐縮しております。私は、フレデリック・バックさんの『木を植えた男』という作品に出会ったことが、人生の大きな転機となりました。まず興味を持ったのは、実は『木を植えた男』のストーリーだけでは

なくて、絵だったんですね。皆さんご覧になった通り、顔がふーっと変わって行って、それが木になって、花になって…。これは何だろうと、とても興味を持ちました。その後、解説を読みますと、フレデリック・バックさんが5年の歳月をかけて約3万枚の絵を一人でお描きになったと知りました。そこにとても感動しました。『木を植えた男』のストーリーと共に、バックさん自身が一人で黙々と、木を植えた男のごとく、絵を描いてらっしゃったのです。



ちょうど20年前というのは、私はすでにレコードデビューしていたのですが、自分の音楽の方向性に迷っている時期でした。私はピアニストなのですが、バブルの頃というのはピアノ1台だと物足りない、よく言われていました。いわゆる、イケイケの時代でしたので、もっと派手にやった方がいいんじゃないかとか、オーケストラと一緒にやった方がいいんじゃないかとか、ピアノ1台だと退屈だとか言われたこともあって、自分はどう進んで行こうか迷っていました。その時に、バックさんがお一人で貫いてゆく、そしてストーリーの中でも、とても膨大な時間を、誰に何と反対されても木を植え続けてゆく。そのことにとても力づけられました。

そして2011年、先ほどもお話がありましたように、フレデリック・バック展が日本で開かれたときに、今日もこの企画にお声かけして下さったスタジオジブリの橋田さんから、フレデリック・バックさんに会ってみませんか、とお声を掛けていただいて、お会いすることが出来ました。それで私の想いを伝え、お手紙を書いたところ、フレデリック・バックさんからお手紙を頂きまして、「いつか由紀江の音楽に、絵で伴奏をさせてください。」という、本当に光栄なお言葉を頂きまして、そして、フレデリック・バックさんと私の、絵と音楽のコラボレーションCDを作らせていただいたわけです。

私は個人的に、高畑監督の『となりの山田くん』の映画を見させていただいた時に、その時は高畑監督とバックさんの関係のことは全然知らなかったのですが、絵のすごく柔らかい感じとか、映画のストーリーとかは全然違うのですが、すごく魅かれていました。そして高畑監督がバックさんにとても敬意を持ってらっしゃるとお聞きして、そして今日こうして同じステージに立たせていただけることになったことも御縁だと、嬉しく思っています。

少しおしゃべりが長くなりましたが、この後、フレデリック・バックさんの為に私が書かせていただいた曲など、ピアノで弾かせていただきます。ありがとうございました。

## 稗田

尻切れトンボなのですが、以上で鼎談を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

## ピアノコンサート 西村由紀江 さん

西村由紀江さんは、フレデリック・バックさんや高畑勲さんたちと交流を持ち、また被災地にピアノを届ける活動もしているピアニストです。シンポジウム当日は、西村さんの御好意によりミニピアノコンサートを開催しました。バックさんの作品がスクリーンに映される中、大富小学校のピアノを使用しての西村さんの生演奏は、会場を感動に包みました。

### 【演奏曲目】

#### M1「出会い」

(アルバム「フレデリック・バック meets 西村由紀江」より、バックさんとの出会いに感謝して)

#### M2「かけがえのない子供たちへ」

(アルバム「フレデリック・バック meets 西村由紀江」より、バックさんから頂いた10枚のストーリーボードとともに)

#### M3「希望の道」

(アルバム「My Stories」より)

#### M4「終わらない旅」

(アルバム「ビオトープ」より)



## ★スマイルピアノ 500

東日本大震災により被災された方々に、  
謹んでお見舞い申し上げます。

震災直後に、いつもお世話になっている調律師の方から、  
「東日本大震災で、500 台ものピアノが失われた。なんとかしたい」というお話を聞いてスタートしたこのプロジェクトは、  
全国の皆さんのお家で使われていないピアノを譲って頂いて、  
「ピアノの音」と「ピアノ」を被災地に届けるという活動です。  
もちろん、私一人で出来ることではありません。  
たくさんの方々と手を結び、繋がって、長く続けていきたいと思っています。



西村由紀江

### 【スマイルピアノ 500 の主な活動】

- 被災地での演奏活動（心のケア、チャリティを目的とします）
- 東日本大震災により失われたピアノを届ける（ご希望の方を募ります）
- 使わなくなったピアノの募集
- 運搬、ピアノメンテナンス、保管場所などの協力の呼びかけ
- 活動支援金の募金活動（コンサート会場での募金箱設置と銀行振込）
- 活動内容と募金額のご報告（ホームページで随時行います）



西村由紀江 プロフィール  
作曲家／ピアニスト

幼少より音楽の才能を認められ、ヨーロッパ、アメリカ、東南アジア諸国への演奏旅行に参加し、絶賛を博す。  
桐朋学園大学入学と同時にデビュー、今までに 30 枚を超えるアルバムをリリースする。

美しく切ないオリジナルのメロディには、幅広い層からの支持がある。  
ドラマ・映画・CM の音楽を多数担当するほか、TV・ラジオの出演やエッセイの執筆も行う。

年間 60 本を超えるコンサートで全国各地を訪れる傍ら、ライフワークとして「学校コンサート」や「病院コンサート」、そして被災地にピアノを届ける活動「Smile Piano 500」にも精力を注ぐ。  
2011 年にはデビュー 25 周年を迎え、国内だけでなく、香港、韓国、台湾でのコンサートも成功をおさめる。  
2012 年 7 月には、アカデミー賞受賞アニメーション作家、フレデリック・バック氏の絵画とのコラボレーションアルバムを発売し、注目を浴びる。  
代表作は、ドラマ「101 回目のプロポーズ」、映画「子ぎつねヘレン」、NHK「アーカイブス」など。

オフィシャルサイト <http://www.nishimura-yukie.com/>



スマイルピアノ500～活動の記録～

お届けしたピアノ：計37台

アップライトピアノ27台／電子ピアノ6台

グランドピアノ4台

音を届けた学校：延べ11校

復興支援コンサート参加など：4回

2011年

- 3月11日 東日本大震災
- 4月9日 コンサートにて「スマイルピアノ500」発表
- 4月28日 被災地視察～福島県七ヶ浜～白河市
- 6月5日 被災地視察～岩手県陸前高田市
- 6月27日 学校コンサート～南相馬市立鹿島小学校
- 6月29日 学校コンサート～盛岡市立桜城小学校
- 6月30日 学校コンサート～山田町立山田南小学校
- 学校コンサート～山田町立山田中学校
- 7月1日 学校コンサート～陸前高田市長部小学校
- 学校コンサート～大船渡市立甫嶺小学校
- 9月7日 電子ピアノお届け～岩手県山田町
- 電子ピアノお届け～岩手県山田町
- 9月26日 アップライトピアノお届け～宮城県多賀城市
- 12月19日 グランドピアノお届け～岩手県陸前高田市
- グランドピアノお届け～岩手県陸前高田市
- 電子ピアノお届け～岩手県陸前高田市

2012年

- 3月7日 グランドピアノお届け～岩手県山田町
- アップライトピアノお届け～岩手県山田町
- 3月8日 学校コンサート～石巻市立湊小学校
- 3月19日 学校コンサート～石巻市立万石浦小学校
- 6月3日 電子ピアノお届け～宮城県気仙沼
- アップライトピアノお届け～岩手県陸大船渡市
- アップライトピアノお届け～岩手県陸大船渡市
- アップライトピアノお届け～岩手県陸大船渡市
- 8月13日 アップライトピアノお届け～宮城県亘理町
- アップライトピアノお届け～宮城県松島町
- アップライトピアノお届け～宮城県多賀城市
- 10月17日 学校コンサート～いわき市立平第三小学校
- 10月22日 アップライトピアノお届け～福島県久之浜
- アップライトピアノお届け～福島県久之浜
- 11月8日 学校コンサート～石巻市立万石浦小学校

2013年

- 1月13日 スマイルピアノ500コンサート～岩手県盛岡市
- 1月18日 グランドピアノメンテ移動～檜葉町立小中学校
- 4月29日 アップライトピアノお届け～宮城県石巻市
- アップライトピアノお届け～宮城県石巻市
- アップライトピアノお届け～宮城県石巻市
- アップライトピアノお届け～宮城県石巻市
- 4月30日 アップライトピアノお届け～宮城県気仙沼市
- アップライトピアノお届け～宮城県気仙沼市
- アップライトピアノお届け～神奈川県茅ヶ崎市
- 8月2日 アップライトピアノお届け～福島県いわき市
- 10月3日 スマイルピアノ500コンサート～福島県いわき市
- 10月4日 学校コンサート～檜葉町立小中学校
- 12月7日 アップライトピアノお届け～岩手県陸前高田市
- アップライトピアノお届け～岩手県陸大船渡市
- アップライトピアノお届け～岩手県陸大船渡市

2014年

- 3月11日 復興支援コンサート参加～福島県福島市
- 7月19日 アップライトピアノお届け～宮城県山元町
- アップライトピアノお届け～宮城県亘理町
- アップライトピアノお届け～宮城県石巻市
- 9月14日 電子ピアノお届け～岩手県陸前高田市
- 電子ピアノお届け～岩手県陸前高田市
- 11月13日 復興支援コンサート参加～福島県南相馬市

2015年

- 4月18日 アップライトピアノお届け～宮城県亘理町
- アップライトピアノお届け～宮城県仙台市
- アップライトピアノお届け～宮城県仙台市



# 大富ばやし



当会場での、児童による、『大富ばやし』を堪能していただけましたか？  
プログラムに記載できなかったので、ご来場の皆様に **サプライズ！！**

この会場で毎週の練習した成果です。都丸幸雄さんが自分の太鼓グループ『やまびこ太鼓』のメンバーと指導に当たっています。昭和 58 年に初めて今年で 31 年になります。初期の子どもは 45 歳になります。この間に県内外、千葉市の親子三代祭りや NHK、ちばテレビの放送メディアはもちろん、太鼓の町、福島県伊達市の約 350 年の歴史を持つ霊山太鼓まつり等にも出演しています。

この度の地元も地元、ホームグラウンドでの公演に際し、安川校長、都丸さんと生徒の保護者さんに、感想をお聞きしました。

## ☆ 当校の校長、安川先生のお話



第 12 回里山シンポジウムの会場として、たくさんの方々にご来校いただき大変感謝申し上げます。アトラクションとして「大富ばやし」を聴いていただきましたが、本校でも運動会や PTA 行事等に出演し、力強いしかし温かな音色を響かせています。地域のご支援ご協力をいただき、この子どもたちによる「大富ばやし」がさらに発展するように祈っています。機会があれば、本校にまたお聴きに来られてはいかがでしょうか。

## ☆ 指導者の都丸さんのお話



いきいきした子どもたちの演奏を観ていると、私も生き甲斐を感じます。タイコ・笛の練習もリズム感がよく、覚えも早いし、教え甲斐があります。これからもお囃子を続けていきます。

## ☆ 大富ばやしメンバー生徒の保護者のお話

普段練習している場所での公演ということもあり緊張することもなく、立派に演奏できたと思います。これを機会にこのような地域に根ざした伝統芸能に興味を持ってくれる子が増えてくれることを楽しみにしています。今回、このような機会をセットしてくださいました方々に感謝致します。

(安川先生・都丸様・保護者の S 様、ご協力ありがとうございました。 文責 木下敬三)



## 第12回里山シンポジウム in 山武 報告書

「里山と資源循環 ～子どもにつなぐ暮らし方～」

発行：里山シンポジウム実行委員会

発行日：2016年2月15日

編集委員長：稗田忠弘

編集委員：中村俊彦、桑波田和子、小倉久子

編集協力：写真・田中正彦、唐笠敦、本間一夫

テープ起こし・並木秀幸

連絡先：里山シンポジウム実行委員会 代表 並木秀幸

Email：namiki.hideyuki@gmail.com

里山シンポジウム実行委員会 公式HP <http://www.satochiba2.jp/>

「第12回里山シンポジウム in 山武」は山武市市民提案型交流のまちづくり推進事業の助成事業としてご支援いただきました。



# 里山に託す私たちの未来

第12回里山シンポジウム in 山武  
「里山と資源循環 ～子どもにつなぐくらし方～」

